

小笠原島紀事

十二

十四

内閣文庫			
和	三	函	七
書	三	架	三
類	四		七
	號		三

内閣文庫		
番號	和	3774
冊數	33 (14)	
函號	173	179



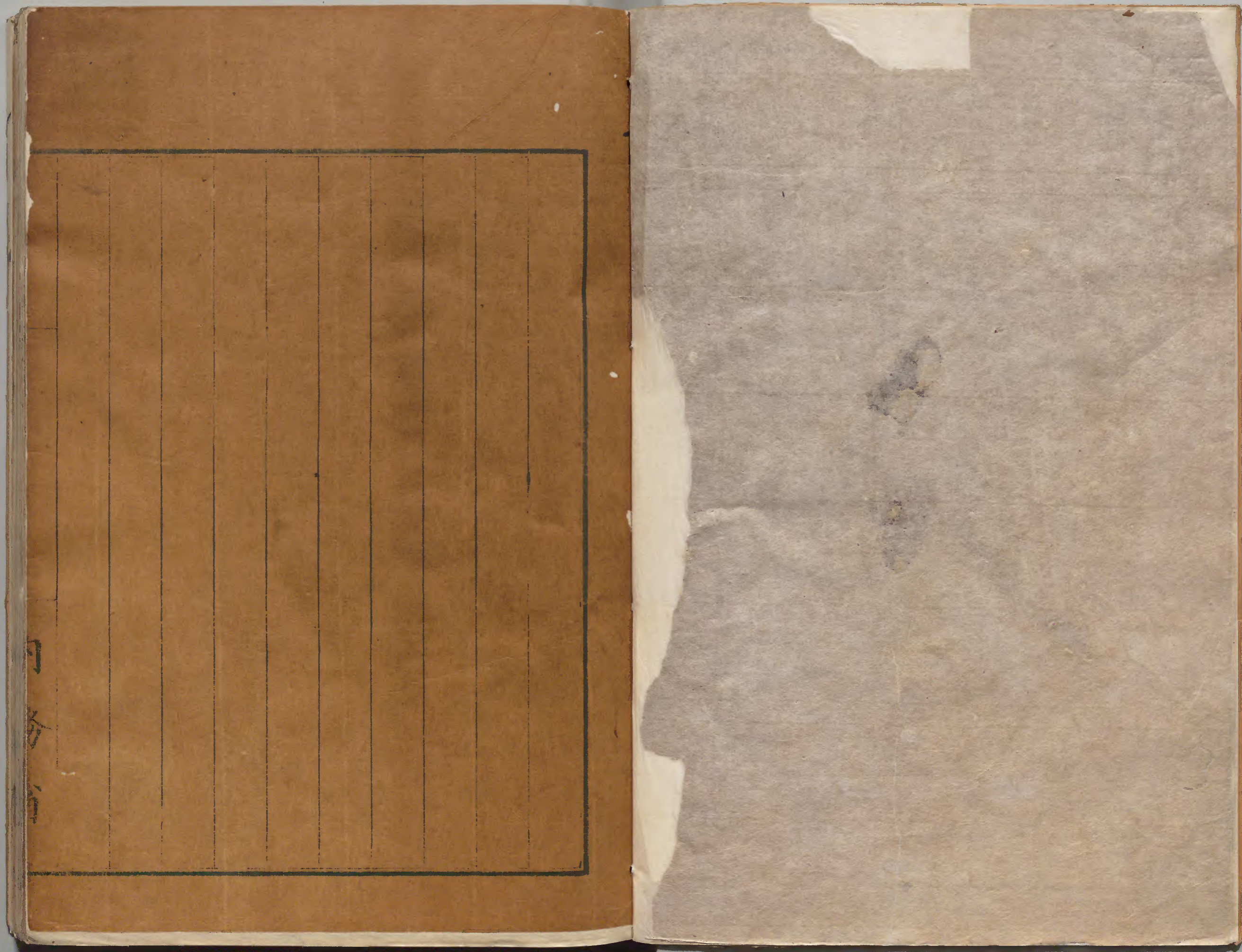
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





月
務
簿

小笠原島紀事卷之十二

目錄

文久二年ノ四

七月三日佛公使小笠原島ハ日本輿地圖ニ
所見ナリ因テ經緯度詳細ノ圖且武鑑翻譯
請求ノ來翰

同書翰寫

同四日英公使ヨリ最前所贈ノ小笠原島規
則蘭文譯請求ノ來翰

同書翰寫



月 務 録

○同十七日孝本國へ開拓告知ノ書翰亞公使
へ委托贈達ノ報告及通送料請求之來翰

○同通送料収領書

○同日佛公使へ過日彼ヨリ小笠原島地圖請
求ノ來翰ニ回答ノ草案

○同廿一日佛公使小笠原島事件ニ就テ閣老
ニ面晤ヲ請フ來翰

○同廿二日佛公使へ面晤ノ日時ヲ定メシ回
翰

○同廿七日佛公使兼而約束ノ如ク此日板倉

防洲カ邸ニ面晤小笠原島來由ヲ説ク公使
再ヒ規則書ヲ請フ

○同日洋曆第七月二十五日附十八号同月廿

八日附廿二号ノ回答並彼カ請求ニ隨ヒ書
面翻譯英文ヲ蘭文ニ直シ之ヲ通與スルノ

回答

○同廿六日忠徳常純カ小笠原島巡視ノ賞典
ヲ行ハル

○八月三日右同断隨行並軍艦方等へ賞典

○同五日去月廿七日勝静カ邸ニラ佛公使ト

對話ノ時約セシ港規則ヲ本日外國奉行一
名ノ添書ヲ以テ贈達

○ 同書翰

○ 港規則

○ 同七日勘定奉行ヨリ葦山縣令カ屬吏小笠
原島へ差遣ス昔之申稟

○ 右縣令カ屬吏八丈島民之内移住説諭注視
崖畧書

○ 同移民へ賜品目錄

○ 同十五日縣令屬吏八丈島ニ残り移民ヲ

外國方へ交付ノ覺書

○ 移民之内選舉注視並手當金授與等之注視
書

○ 同廿六日朝陽艦再小笠原島入港外國方監
察方醫師及移民男十五人女十五人並出稼
之大工五人木挽一人鍛冶職一人乘組着島

○ 同廿七日去月廿七日並書記官へ前ニ字國
政府へ書簡通達ノ費用授與ノ申稟

○ 同書翰案

○ 閏八月日附不詳田中廉太郎ヨリ移民居小屋造

立並井戸新堀等ヲ始遠方地所新墾ハ暫見
合北袋澤一同伐開南袋澤起返地味の當ニ
諸品植殖食料ノ余分ハ勿論今般種殖之果
物生熟セハ外國人へ貿易一件或ハ芭蕉布
織立等ノ業ヲ開キ総テ移民共懶惰不取締
ヲ戒メ又植付ノ蕃薯ニテ燒酎釀製及食塩
ヲ禁カセ蠶ハ甲ノ佳品ナルハ江府ニ搬運
シ其因ハ油ニ製スヘキ較計其他魚油ノ製
方ノ詮議女子ハ相應手業童男女者芭蕉布
ノ絲績ヲ教ヘ男女老幼ニ至ルマテ閑居十

カラシムヘキ旨数件ノ下知ヲ傳達ノ覺書
阿部将翁数種ノ草木果物菜蔬及藥種等ヲ
携來植殖ノ較計

○同日在民セシムス病ニ因リ出島他國へ
轉任ニ就テ其所有ノ諸品政府ノ買上ヲ悃
願

○同人願書

○同月日附不詳田中廣太郎母島へ渡航同島在民
マツレヘ對談シ其地ノ便利ヲ計リ移民ヲ
引分ケ渡サレ旨ヲ決議シ出帆然レトモ先

父島一所開墾ノ交功立テ後ト姑此事ヲ止
同十四日中濱万次郎君沢形船へ乗鯨澳ヲ
先務ニ閑暇ハ通辨ヲモ兼後シ且捕鯨ノ方
術ヲ移民等へ傳達サセシ事ヲ兼テ上申ノ
トコロ本日許可

右請書

就右事件並山縣令ヨリ勘定所へ伺書
君澤船ハ小形ニシテ捕鯨不便利因テ別段
捕鯨適宜ノ船雇入ノ申稟

同九月九日小笠原島在留ノ官吏議シテ移

民使役ノ方法ヲ定ム

右議定書

同月廿八日先是並山縣令ヨリ中濱万次郎
小笠原嶋捕鯨一條ニ付越後村松濱平野廣
藏船乗用ニ付数件之申稟有之本日指令

右申稟書

同指令

同月中朝陽艦小笠原島ニ滞泊病テ船中ニ
死亡ノ水主五名各同所奥村谷川ノ奥先前
死者葬地ニ埋葬

十月九日在島官吏檢地シテ移民へ畑地ヲ
分與

右坪敷書

同廿六日兼テ小笠原嶋へ滯泊ノ魯船指揮
役ヨリ其船ノ水夫脱走ノ報知及島中警派
違ノ諸吏ニ捕縛依頼及病者上陸加療許可
ヲ請フ之旨存島ノ官吏へ來翰

就右小花作之助ヨリ兩條承允ノ返翰

同廿九日存民コルソンス居宅ヨリ奥村ノ
方隣濱ノ地ヲ官吏檢地シテ貸與へ開墾ヲ

許容ス

右拝借證書

十一月十九日先是中濱万次郎鯨漢中心得
ノ稟議ヲ呈セシニ本日稟維

右指令

文久三年ノ上

正月七日小笠原島出張兩局官吏等議シテ
移民及出稼職人等ノ休暇ヲ改定ス

同九日平野船小笠原島へ着港中濱万次郎
捕鯨主宰松浪權之助林和一郎等移民捕鯨

修業トシテ乗組同所出帆鳥島へ至リ日本
属島ノ札ヲ建

○ 同札圖

○ 同廿一日去年十月五日於小笠原島在民キ
ルリ一暗殺セラシ其殺害人探索ヲ命シ數
回促セトモ因循有無ヲ不告因テ本日平野
船一同徴出糺明ス

○ 同島民稟狀

○ 三月九日亞國鯨漁船ノ水夫脱走船長捕縛
ヲ小笠原島在廳吏へ依頼

○ 同書翰

○ 同日日時不詳亞國鯨漁船脱走水夫三名小笠原
島官廳ニ自訴ス其實士官等ノ苛酷ニ出法
ヲ敗ルハ不輕ト雖 皇國ニ對シ有罪ナラ
子ハ規則書ヲ讀聞セ請書ヲ為サシム

○ 同請書

○ 五月朔日平野船小笠原島退帆松浪権之丞
林和一郎巫人スミス及ホーワン二名ヲ召
連歸府罪人一件別冊ニ詳
ナレハ于此載セス

○ 同九日朝陽艦三度小笠原島入港在島諸吏

及移民等引拂ノ下知達來

○諸吏退散ノ崖畧

○官宅及諸品諸船殘穀等島民へ頒與

○種殖ノ草木藥品等培養ヲ島民ニ遺托

○廳舎ノ蹟ヲル_レイ_レス_レツ_ワニ托ス

○同人保狀

○島民等へ授與ス_レ所ノ家屋及諸品並諸船
等收受且向後小笠原島ニテ困難ノ日本人
ハ便船有之迄扶助スヘク將開墾碑及冥福
碑ノ兩碑並墓地等大切ニ守護スヘキヨシ

ノ請書

○セ_レムスマ_ツレ_シ出島ノ時所有ノ諸品御

買上ヲ申稟ノ横文原文交還

○同譯文

○移民開拓地八千余坪ヲ在島外國人ニ委託

○同十三日朝陽鑑小笠原島出帆在勤諸吏及

移民一同引拂

○同十九日朝陽鑑品川海歸港諸吏歸府

○七月

日附未詳

菊地伊豫守上申_レテ小花作之助

益田鷹之助松浪權之丞及醫師阿部將翁力

門後

月務

賞典ヲ請フ

○同上申

○阿部將翁賞典之上申

○十一月日時不詳竹内下野守菊地伊豫守連署シ

テ小笠原島開拓費用殘金返納ノ申稟

此書中ニ小笠原島書類悉皆焼失ノ事ヲ詳ニ載セタリ

○同十五日江城水丸北隅ヨリ出火柳營焼亡

此時小笠原島事件書類悉皆灰燼ニ属ス

○元治元年

○月日未詳外國奉行連署シテ小笠原島向後

ノ慶分上申

此書末文惜ムヘシ結局未詳

内務省

小笠原島紀事卷之十二

同文久二年七月三日佛國公使書翰ヲ進出し小笠原

島ヲ載セシ皇國輿地圖ノ所見ナシ因テ經緯

度ヲ明細ニ書載スル所ノ地圖及從前制禁ノ諸

本且武鑑等ノ翻譯許可ヲ請求ス

千八百六十二年七月廿八日江戸

外國事務宰相台下ニ呈上

余小笠原と名付たる島ありを記せる書翰を

前年より其書中より此島ハ日本國の南方と阿

王は島の各ハ南の所指せる日本地圖と見

内務省

元は且台下の書管中は經交律文を示さるる
不承此告知を公に採里用ひ得る前承の存意
を述へ及至説明を聞らざるを得及我政府は
必は是説明を承不問ふなるへ
台より此書の回答を繕らば此書は此書付の
回答を送るへ

余は台下の語不承不日亦所領の國或は高
く精細なる書付を繕り給ふへ
我國の商船或は運禮口切の所領多るる所
ふさる地の上陸を不尚て混雜を避らん

為なり

台より不承函の經緯文を精しく記する地圖
を繕らば已不承不乞へる台下の求不意以へ
一は地圖及び書類の譯承を不承澄の譯を為
は是是之様不禁書及及不政府の譯承の抄
き不周り外國人様不使長船の譯を御らる私
用の通譯志を妨らる古と豈き我懇願及但一
は譯承を不政府へは國の標を不書き繕るへき
人なり我譯承は一日不使長書は函不在る
午フ口マ午一ケ使長々様子、不承一丁不支

を思ふ事となし小分ブ口マナク使成ふ
も我國より日本使成ふ所ある如く学問の
為め右同様自由を得せしむること要用なり
其故ハ英國より於て良き学徒を育たる為も通
譯者を使用たる理も西洋諸國より亦と然り
あり條約の意味より生れたるなり此條約白

日本在留佛蘭西全權ニニストル

トゼントヘシケル手紙

アレワキマン 譯

同日日過日所贈達ノ小笠原島規則ノ事ニ就テ
英公使ヨリ左ノ書翰來ル

第二十二号

千八百六十二年第七月廿八日 横濱ニ書ル

外國事務執政台下ニ呈ス
承譯而本月^{十一月}二十六日世人島の事を載するを
籍を前年より此事中より此島の港と貿易場の
規則書あり控れ共最後より載する事ハ亦不詳
をさるる事其意を英吉利文を解する人の翻
譯したれハなり亦亦台下是迄之志とく日本

文を和葉文に翻譯して年々増えたりと云
候ならん

又此島の事を載ふる第七^{十月廿五日}附第十八
号之年可公書の回答を贈り候とん事を請ふ
事候事

不列顛女王陛下のキヤルヂスフエリス

イシントキヨレニール年記

日本在留書記官

エル、エウスレニ 譯

同十七日過日亞國公使館ニ托し、李國政府へ小
笠原島開拓告知ノ書翰ヲ贈達セシテ周旋し速
ニ通送ノ報告及通送料ノ返辨ヲ請フ旨書記官
ヨリノ書翰來ル其書左ノ如シ

千八百六十二年^{新七月十七日}八月十二日日本江戸合

衆國使臣館ニテ書ス

江戸外國奉行水野筑後守以下ニ呈ス

二三日前、李國政府の小笠原島一件を載ふる
一書をへりし^{各地}の外國事務ニニスト
ハ送るの困難を爲ん可爲、以、之を呈下より

諸取取り且年益下小答一之と若送る一
と約儀也里

迅速ふして且綿密なる因程と謹むんが為め
本様候ふて躬ら此るを為せり又は回轉御儀
お拂之新法出て政府あても此法別々遠所廻
うらさるるを注意せり

取ふ取は書状候メキレトトレテ十四個四
十セシトの言を拂へり

余は書中おし書取事をお入ス且下或ハ且下
く代人より此言を余に返漏一給らんこゝ精

まさるるなり教白

ア、レ、セホルトメン手紙

へりりし各地一迅速に送るべき状候十四トレ
り四十四セシトの言をア、レ、セホルトメン氏
より諸取取里

千八百六十二年茅八月九日横濱より

船脚安語人

マレ千レ印

ホルトメンヨリ前ノ書翰到來ス因テ過日佛國

公使ヨリ小笠原島ハ 皇國輿地圖ニ所見ナキ
ヲ以テ経緯度等精密ナル繪圖請求ノ來翰ニ答
フニ文左ノ如シ

佛蘭西全權ニニストル

正キセルレンレリ

トセシテベレクルニ

小笠原島経緯度其知る事ニ付詳悉報レ其圖
第七月廿八日附テ函翰成事其意を録セリ小
笠原島一名母人島西洋所唱フロソヒスヘ
アイルスニ有ル小緯廿一度三十二度より或中

七度二十五分英國東經一百四拾五度六分よ
至二十分の間ハあり同島ニ他ニ其許ヲ指シ
杖函地圖上ハ何ヨリ有ル者中載サレハ定ル
者水ト云るをハ著セ一地圖なるヘ一者ニ
市中賣鬻に用テ刊行セ一其のなれ
其已れハ明見ハ及不変を記セ一其其國を尋
ル事ト不能トテ僅ニハ其島の傍ニ注シテは
より南ヲカ、有ル嶋あるヨ一を記載セ一なる
ハ他市中賣の地圖數多アリとも總島ホトハ
其島の地ハ起リテハ細シ詳シトテハ畧セ

子その不女元より秘函送函の風習知國の志
一糸以垂き者少ありねと其儘小過と一う逐
く知必人より地圖を求然らるゝとのなれ
此程より其節とのの糸一重函の地圖及び
沿海の淺深周圍之廣袤經緯の度程其詳悉一
是を梓小鐫めんとの目論見あれハ其可なり
一上ハ早く表示せし一水笠系高き等取水跡
筑後智初巡撫之細悉一く測量せし一のなれ
ハふ日是を梓小鐫免中外一般に公示せんと
是る故其第一本を繕る越き間まらして了解被

致致或艦之倭國より禁秘に過ぎぬありされ
る巨細明示および度量存候れとも百葉指圖
之亦多なる精指除遣之類類なる日小摺り月
小段すれ等一概之辨明一り多一む法候之類
并摺指指揃ふ之委曲並過日宛寄詰の者より
是せ一り已るり知取され一奉とおり已る將
御官不足之儀之付あり中越れ一ハ糸方お
以ても公私之利便事小善多りれを其論之
去一精一付生徒教養急りさ其漸次學業
本熟とす之便用自在を以る不至る一付候

回答中の夜相異譯云

文久二年庚辰月日

服部中務大輔

水野和泉守

板倉因防当

此書亦書翰取扱ニ載セズ若未達中及ニ載
スル應接ニ漏レ歎又ハ味頃小笠原島務ハ
南島掛ニテ掌リ日記愈ク島有トナレハ今
詳ニスルニテ有ナケレハ姑ク之ヲ省

同廿一日佛國公使左ノ書ヲ贈リテ面晤ヲ請フ
是小笠原島事件ニ因テ也

千八百六十二年第八月十四日江戸佛蘭西
使臣館より

外國事務宰相以下ニ呈ス

承譯テ台卜と何れの日會合及趣きや之を知
セ給テハ外國子務宰相台卜、系と云へ

佛蘭西全權ニストル

トセレデヘレクニ手記

ウエイウエイ 譯

同廿二日佛蘭西公使工面晤ノ日時ヲ定メ回答
ス其文左ノ如シ

佛蘭西全權ニストル

エキセルレシ

内務省

トゼンテヘレクル

貴國茅八月十四日附之書翰為手書り我七月
廿七日八つ時前貴國茅八月廿三日面會可致聞用防
守邸宅一事訪可致之我相々詳言

文之二年戊七月廿二日

脇坂中務大輔 花押

水野和泉守 花押

板倉周防守 花押

同廿七日周防守板倉勝靜邸工閑老列席佛國公
使卜面會之小笠原島来由詳ニ演述ス公使氷解
レ他日同島規則ヲ授與セラレシ事ヲ請フ閑老

美諾畢テ退引ス同日英國公使工閑老連署ノ書

翰ヲ以テ洋曆第七月廿五日皇曆六月十日同第七月二

十八日皇曆六月十三日兩度ノ來翰ニ答回ス

額利太亞シヤルセタフヘル兼コニシ工

ルセネラール

エキセルレニシ

イレントジョルニール

貴國茅七月廿五日附十八号同月廿八日附二
十号号の書翰為手書中紙板額洋セリ一休呈
之稱呼之小笠原島の俗稱ノ一丁三彈崎とも

内務省

小舎也稱以多事不有之且つ遊る形体の欠乏
思を儘一強興也人として仕たるとハ素より自在
之交通小柳妨礙なりと規則之依て同端一義
是ハ其外國を以て尋ね極め一書面先小お進せ
一かゝる譯の英文難解極り付別業文小お直
一差違一其官右にるり解有る事、存其右二
通之返書如所、其辨具詳之

文久二年戊午七月廿二日

脇坂中務大輔

水野和泉守

板倉固防守

同廿六日今年三月小笠原島ヨリ帰府シタリシ
忠徳常純ニ賞典ヲ行ハル

外國奉行

金十五枚
時服四

水野筑後守

漆目附

金十枚
時服二

服部 隔一

小笠原島係開拓爲以用務賦骨折快ニ付被
下之

右芙蓉間ニ於テ閣老列座周防守勝静演達參政

侍坐人

同八月三日小笠原島ヨリ歸府ノ布衣以下及拜謁以下ノ諸吏工賞典ヲ行ハル

小十人

贊善右内門組
内軍艦組出役

銀貳拾枚

淺羽早次郎

小十人
内軍艦頭取

小野友五郎

金貳拾枚
時服二

外國奉行支配組役

由比右左内門

金三枚
時服二

内勅定

深山守平左

同

外國奉行支配組役並

田邊 玄一

金貳拾兩

内徒目付

佐藤高五郎

金拾五兩

小笠原島開拓為内用羅城骨折去付被下

之

右於右筆部屋縁頼閣老列坐勝靜演達參政侍坐

又徒目附ハ燒火ノ間ニ於テ演達先例ナリ
此席ニ出入ハ持格ニヤ本書ノ終ニ載ス

原中様下田日記載上

小野友五郎

小笠原島海岸平好測量之儀格別骨折女

付被下之

右於同席再七呼出之勝靜演達參政出雲守堀之
敵侍坐又

仰目見持板

富士見番

水軍艦組

銀三枚枚

鈴木琢之助

寄合医師

蕙畝總欽

金二枚

小野 荅菴

富士見番

水軍艦組

銀二枚枚

菅代和三郎

小笠原島為所用孫越骨折女之付被下之

右於躑躅間參政出坐遠江守加納久徵演達又

外國奉行支配
書物所用出役

金指五兩

富田達三

同

金十兩

須藤謙一郎

江川左衛門尉門下務地方子附
以多語錄枚

金十五兩

中濱万次郎

产田采女正家母

銀三拾枚

宮本元道

宗律養子
澤書潤有修國祖役

小笠原島為比因孫就骨折去付被下

右於槍間同断同人演達又

同日勝静同朋奥山金阿於ヲ以テ左ノ書二通ヲ

軍艦奉行江通與又

以軍艦奉行

以軍艦組

銀五拾枚

紫 博一

同

塚本桓輔

銀三拾枚

近藤熊吉

同

松岡盤吉

銀二拾枚

高橋榮司

同

豊田 澄

銀三拾枚

松浦金次郎

同務

戸部

水軍艦方下役

銀七枚

矢野澤次郎吉

右之者共小笠原島一為所用在城管折換
付所磨美と一丁書面之通被下長官其版可
被中違換

戊八月

水軍艦方下役

銀七枚

堀本桓輔

銀五枚

松島登吉

同

豊田 港

右之者共小笠原島海軍其外測重之義換別
骨折共付為所磨美書面之通被下長官其
版可申後換

戊八月

同五日先月二十七日勝静力郎ニ於テ佛蘭公使
面晤ノトキ小笠原島ニテ忠徳常純等力極メシ
所ノ規則書ヲ後日通與セ乙旨ヲ約ス因テ日本
外國奉行伊豫守菊池隆吉一名ノ書翰ヲ以テ規

則書ヲ贈ル其書左ノ如シ
其時港規則ノミヲ贈
リシニヤ小花権典事カ筆記中ニ
所載港規則ノミナシハ姑據之

佛蘭西全權ニニストル

工キセリシコエー

トゼンベレクニハ

以書管中入使此程我外國事務執政對話之砌
被中立其極もあれし小笠原島規則事写抄者
より可取意旨被中領多れし別所與差違在在
具詳之

文之二年戊八月五日

桑池伊豫守

小笠原島港規則

- 一 諸國之商船鯨漁船等港内一碇泊之節其具
國名船名船長之各領數乘組人數船名及來之
極も早連日本領所中ニ都各其役人之名國
之從不違起事
- 一 諸國之船之出入港之船稅并輸出入之商稅
之不及差出候事
- 一 港内碇泊之船之漁魚妨碍あるをりつて
不可發炮候事
- 一 港内出入之船之水先業因之者一定之界限

可拂事

- 一 港内碇泊し船々急廻り不慮に上陸し上遊獵し
- 田畑を蕪し其外を法に不あし其捕獲船
- の船長へ引渡お尚之過料可為差出奉
- 一 急廻りし因苗島へ在苗一或ハ一時滞在候
- る事と預ふとのありハ其船長へ申上候人
- 之善圖可從可
- 一 渡來し船小便り立去候在苗之外國も同断
- し可

右之條々文久ニ在戊辰月於小笠原島水野筑

注書版部留一定しとの也

本年五月廿二日佛始各國工規則書ヲ達し
今復規則書ヲ贈心ハ何等ノ誤ニヤ詳ナラ
ス

同七日江川太郎左衛門手附手代共小笠原島へ
航海ニ付豊後守小栗忠順左ノ書ヲ進達ス然レ
共各八丈ニ残り移民ヲ好國方へ交付ス

江川左衛門左衛門手附手代共小笠原島
江村忠房系中上候書付

小栗豊後守

小笠原島ハ八丈島民引移用として外國奉

内務省

新内目附支配向并代官江川右殿在由門子
附年代古船陽九所船一系胆八女島一着幕仕
其受回島家勢一其可然船繫揚母之付梅瓦
中隊中船陽九所船一先中隊一其防所
遣之船所系在船台尺計尚又再反仕其積之有
之船子受家勢船陽九出帆前古殿在由門子附
年代昔修八八女島編民中隊中漏發一其御
奉新内目附支配向之考一引海小笠原崎一其
不及其賊島主以伊豆國附島一其備向一見七
一丁廻島為殿其取可取計多被作海長之付其

既中後其不丁孫賊其家其殿小笠原島之
儀古殿在由門支配所一被任付其之付而古不
之取福古有之其之付古子附年代其修被地一
其源同島之押操一見為仕殿古古殿在由門中
之尤之篇一其相聞其古古所船一而一回小笠
原島一被其是歸船七島古也廻島當仕其方一
其存其之付船陽九所船八女島再殿之而古一
其一中殿其細古殿在由門より子附年代古一
中其其操為取計可中と存其修之其船中其
以上

戊八月

同時太郎左衛門ノ屬吏八丈島ニテ移民ヲ説諭スルノ概畧

八丈島役人一同ノ定初申談其口ト大意
ハ八丈島より凡百八十里程正の方ニあり小
笠原島ト申邊此方所聞ハお成共ニ付人の始
里ハ八丈島より所引福可取計台被作也其旨
男控五人女控五人何色も未始志ニ丁小笠原
島ハ引福一書志お撰ウ申立其撰ニ断り其を
めニ其所各島ト一ニお成共付之通人毎ニ被

下ニ被島ハお成共後田畑切平クき極付ハ未
麦手外島分ニお成共物徹立も出来極迄ト上
より采麦味増習油其知ク食物ト勿論居小家
所仕き止ト被下置御方ニ次第トより其而
立所慶美尋も被下置ト島人の関祖トお成後
この世より豊神代ト人ト被教可申道理ト付
冥加ニ程種立お辨ハ人物宜成之のをお撰ニ
可申渡人等其此因ハ加ハ難トたと一よ其を
とりハ換而ト善ト重換極ニ貧ト其そのたり
とも人物よりト快ハト重る未始お成取

様之重もあつハおのひの通流也を可中若
 男子成連之引極り交之是め何日たり可お
 成女子を撰む過一女子を連之引極り交之の
 ハ是又めあ日たり中男子をとりひ交可成連
 共大ニ在官能治殿号お公治其之の十人出縁
 と一之此交成連可中其官人物お撰可中立心
 一日の成子尚何程に戴政交成承紀一可中立
 其
 右等之成極意之而此交 公候より蒸氣形以
 蒸液之お成候之付島役人立一回厚く蒸之極

里成極意通り撰方以一可中何れも此蒸氣
 形之而此成連出縁之その是過而外之此形を
 以て成差偏之可お成候小笠原島之立江戸表
 より得之被是許り成其極有之候間安公以多
 一引極候様撰之小加里候之め一可中間候

成七日

別紙

白河内本綿	壹反
松坂行男物	壹反
同断 女物	壹反

内務省

小倉 帶

五兩

五兩

移民男女子供与是人別々書面之通被下之

同十五日太郎左衛門屬吏ヨリ外國方工移民ヲ

引渡ス

寛

農間漢軍移出來

伊豆國附八丈島之田

大賀公

百姓

孫 勘

女房

三十三才

み

三十五才

與依吉

四十六才

女房

み

四十三才

藤 勘

三十二才

百姓

前同断

此の通り 在りし御用金 工代 等 引渡 候 事 申 上 申 候 事 也

女房

左

三十一才

三根村 百姓

重吉 勘

三十五才

前同断

内務省

法り取相てつ候ふ人し子代を引取らる同姓
なりおもしろく云々良き事なり

女房

丁川
四十五才

末吉村
百姓

七
五十四才

女房

三
四十六才

俣

四
十四才

常松(めあは)

小
十才

百姓

松
四才

女房

了
三十五才

俣

常
十三才

四房(めあは)

女
九才

宋の江
百姓

三
二十七才

女房

お
二十五才

百姓

お
四十七才

女房

お
四十才

百姓

お
二十一才

女房

お
十三才

櫻之村
百姓

信
三十一才

女房

お
三十才

畠間(五)漢事(秘)出来

内務省

牌
傳
八
松

勇松一足あひせ
七
九
一

豊岡漢子松製結出本
多姓
金
三十二
松

女房
わ
三十
寺

牌
勇
十
松

竹松一
娘
と
五
畑

右之外由縁々者

大智
百姓

脚
三十二
松

大工
同
半右門
二十一
松

加下方
忠
五十一
松

本挽杣
三
根
百姓
忠
三十一
松

大工
四十二
八

目
新
三十一
松

八丈島指
少島之四
宇津本村年寄
由益
山久右衛門
二十五
松

島
村
百姓

民
五
二十一
松

島
村
百姓

民
五
二十一
松

ノ人数三十八人

右ノ八丈島出百姓歎人数之因より今般小笠
原島一隊引移可相成福民并出稼之者共書面
之通引渡中扶以上

江川善長在門下附

成八月十五日

川 寄 信 平 印

江川善長在門下附

上丹村善平 印

亦國方

松田晋楠 版

附同付方

系 又 吉 版

覺

大智心 孫 卿

三根村 董 善 長

末吉村 豐 七

中之川 三 八

櫻立村 傳 吉

右之若丸真実ニ而差働也之故地役人九内

調中抄状

一出稼八人之者一日壹人取云每七分五厘の
、食料之外は手當被下状に付於八丈島處
五畝の、毎借取部取振回寄輔より中園
るを和仕り以多一其部去右路處去不更取
百姓去勿論取方をも公澤所五畝振中出

同廿六日朝陽艦再七小笠原島へ着港外國奉行
支配調役田中廉太郎定役取田晋輔同心金坂貴
之助徒目附富永一造小人目付原又吉医師阿部

将翁乘組渡島八丈島へ立寄移民男十五人女十
五人大工五人木挽一人鍛冶職一人ヲ連來

同廿七日去月十七日小笠原島開拓事件ヲ學國
政府へ報知ノ書翰送達費用ホルトノ申立ノ
書意評議ヲ遂ケ本日外國奉行連署ノ書ヲ以テ
閣老へ呈入

亞國書地官より差出状書翰之義に付
申上状書付

外國奉行用立書稿
外國奉行

此般小笠原島開拓筋之義に付孝漏生政府

以之由事解雇方要國公使一由托由成其處分
紙之通要國書記官より申出候一體字偏生政
府以之指書解等々孫方要函方一由托由成候
儀々字偏生國締約取結之節要國前任公使ハ
以り又格別因候仕候より字偏生小關係仕候
事件々都百要國一由托由成候儀々付是迄之
要々書解雇方出費等々儀々付被是申出候事
も望々其得々右等々本國軍艦之便等々而高
儀々望々其得々候儀々可也之儀々高儀々由托
候とて既々右様申出候上之儀々より以候上

お成候より御所而爲々其之旨爰書存候由候
出方候々小笠原島由國振所由京海軍之由
至仕拂別紙之通伊豫守より返候若々其様可
仕存存候儀々其様譯文返候業々由候此由候
何様以上

村垣清政書

津田近江書

竹本隼人書

一色山城書

田澤對馬書

桑池伊豫守

別券

西米利加合意國條臣館書証書

正スクワイニ

アニセポルトノニ

貴國茅八月十二日附在以下前但外國在勿水
控下總司一義送らば一書翰在先日我外國
事務執政より字漏生政府一之書翰在方其許
因禮務殿一旨委女取承厚意之取扱厚く福次
子受ニ長右状受と一了ノキレコトニラニ十

四枚四十セシト其許子許より柳被至一由
与飛御世話人工レキレ之受取書在派中出ら
れ一即其教之如く返宛および其旨在後手被致
官扱下総司轉發ニ付法如報答および其詳云

文久二年戊八月晦日 桑池伊豫守

稟状ノ通指令滴ニ因テ同晦日コノ書翰ヲ達ス
本文ホルトノシヘ所托ノ字國政府へノ書翰案
書留ナキハ前ニ云如シ按スルニ前ニ載セシ忠
徳常純カ稟議ノ書ニ添シ亞國公使へノ書翰同
文ナレヘシト考フレ氏其證トスヘキモノナケ
ムレハ今可否ヲ定
ムル事ヲ得ス

同国八月田中廣太郎小笠原島へ渡航左ノ件々
ヲ示談ス

一 福民共居小家ヲ建福之上該島國邊濕氣ヲ
防其極ヲ建方之事

一 若也暴風津波等其之居歸而相損其命之退
要之可相成聖宰之業風降之乃一き場不

一 石建之事

一 井戸堀増之事

右之出稼人有係在矣因未之相整其極致反
存其事

一 遠方之地受起運等之習若蓋小袋澤一休

伐開其後南袋澤起運一地域の當之該島植
付食料之余分其外國人之賣渡其極取計方
之事

一 阿部將翁相公得其極物致之用果物生熟之

上外國人一も以拂之其成其極致反其子

一 芭蕉布其外相應之織物出来其極致反其子

一 福民共懶惰不取蹄等不生極進退之可

一 食塩製方出来其極致反其事

一 西覺坊之甲之乃一き要取集め江戸廻之可

一油之可緩品穿鑿之乎

一魚油緩方之乎

一女子共閑居之暇母之極古態之行業之凡之

事

但芭蕉布之可織糸物一方昔之傾去子佳

之仕事之可有相成与存候乎

一極付其薩摩芋芋より梅耐之取極致其

事

先是八月中阿部将翁江府出途ノ節巢鴨植木屋
長太郎同知之吉ヨリ買上携フ処ノ藥草果水竹

等ヲ植工其品目本密柑九本雲州密柑九本九年

母九本養老梅九本アノス九本夏秋桃九本前目柿

九本紅ス三九本梨子九本大實林檎九本大実

柘榴九本葡萄九本金柑三本真竹江南竹九本胡

摩竹一株亀甲竹一本使君子三本蒲桃三本橄欖

二本東京肉桂七本○東京肉桂二本龍眼肉二本

灌種縮紗二株黄耆二株木香二株甘草二株灌種

杜冲二本土伏苓二株生省藤二株吳茱萸二本延

胡索二株銀合歡二本金合歡二本巴豆一本肉豆

寇一本ナリ尚松苗千本杉苗千本椴木二百本檜

木五百本ツガ苗二百本ハ後便ニ送り渡スヲ
托し出帆スト云リ

閏八月四日在住セムス病ニ依テ小笠原島ヲ
去リ他國ニ轉住セン為メ其所有ノ諸品政府へ
買上ヲ願フノ書ヲ出ス

子八百六十二年九月廿七日

日本政府役人へ

一拙者セムスモイトリ一義十九ヶ年程在
島居住然ル處此程病象お生れ付急候

お憂りお悔不一轉住以多一安物多と拙者
并附屬之者共立退候多免便船取之次第拙
者所持之品々日本政府へ賣拂申度存候也
右價々或千下ルラレニ取之候
一自願拙者死去以多一候ハ、書ケワテ井一
依同様取計可申事

セムスモイトリ一

同月田中廉太郎母島へ渡航シ島民ケエムシ
マツシへ對談ノ上所差出ノ證書便船次第父島

ハ鼓シ来ラハ人数ヲ分ツテ母島へ渡航スヘシ
ト豫メ其準備ヲナス然レモ父島実功ノ後ト姑
此事ヲ止ム

同月小笠原島鯨漁トシテ中濱萬次郎へ渡航ヲ
下令ス其達文左ノ如シ

申渡

江川幸長在由門以鯨船方子附
以幸請後格

中濱萬次郎

右在小笠原島一君浮形共番以船長廻ニ付右

以船ハ若乗組美意一鯨漁事務ニ取扱果勝之
節ト通辯セモ為私公情且右陸船運轉并鯨漁
ト仕方等以度ハ士端より之福民トモ一為私
敬快積リ私倉国防書版一何私漏扶間生限可
申渡矣

右之通被作渡等畏快委細右長在由門一可申
聞扶以上

閏八月十四日

根本信義印

右芦名重次郎より申渡

就右勘定所へ左ノ書ヲ出ス

内務省

手附申渡万次一被作渡其難漁
之修之付何書

私渡之般小笠原島一被差是君浮航六島以私
一景但難漁之務一取扱不略之節之通年之也
おの好具右以船運持并難漁之仕法等法云ハ
大崎より之移民とも一お差其積り被作渡其
船子受元東國地廻航之義出帆後風様不且其
得之急度皇向福港一入津風待之上吹風次
才系出持りも風様一寄第度も急度一延延時
快義一有之西洋形法船急方之候之右之邊ハ
延延之港出船より着船可仕港中丁航海舟航

上ハ風様不且其苦地形之港一遊ハ其様一義
有之其而之西洋形以船之程も其之候而也帆
前ハ船之善悪是定其候第一ハ其極其船ハ
受七八ヶ年前ハ其製造一お成其右君浮航船
六島以船之義之當年一より水上ハ其船後
お成其舟下ハ其船度昔要ハ其之受其極其義
其由取申其右体之其船一景ハ其候何分極其
仕直其小形一丁大津一お成其難漁お成其
義ハ其船其右小笠原島一渡海同島港内一お
丁編其其右難漁仕法運持等教授被成り已

内務省

之義、長侍君得形此船、而も美支母世望
持回尚而石川崎、おわ丁作機後者之持由之
壹番此船見面上係付作機後出来之上右係船
二而急組束用被作付其様仕交存候以上

閏八月

中濱新次郎

君之通子附中濱万次郎中三共、付此船中上
候如何可中濱東川右左等御世

江川左兵衛右門

御勘定所

子附中濱万次郎、被作渡母鯨漁船
所廢之義同書

私儀此度君得形六番此船、急組小笠原崎一
被美在鯨漁船生御之、法用被作付其要者船生
舟一小形少丁小笠原高一往後迄之義、其得
古美在至之寫委其得其鯨漁船生、速も所用
達不中鯨漁仕候、古右君得形より大形之船
二而本船より小船を被取一鯨魚遊去其前生
其御在遊可本船生御、其御より急走り鯨魚
之弱更其歩丁何れより由美心、古其故君得
取之古と起小船、丁ハ鯨漁生其其候、候之候

内務省

望以上有以船之朽之由本丁以製造之
成號之七八十年之經此亦水上之出也受の之
法經後軒要なる新艦其候被着為其由其候
危き所船且生少形奇大洋中を急迫し鯨漁之
大業を其成畫中其候る要事也城後國平野廣
越占中若為國忠鯨漁國業仕ふ存念に而四五
今年以來出府制之時年中二船官南之船を其
求め悉械を其出來其要鯨漁之實地教授設其
吉望之取日本海に生着之鯨漁自他無差別其
く吳人共一被奪其候遺憾其款ヶ其被之其見

快体而若私に雇上り候以而私に其被漁候
前書之鯨漁所用被候漁具一之急候之者とも
陸科并食料を包み下へ被下至私賃等ハ私に
より以下へ不取候鯨漁開海之時節自分獲之
荷物運送に其許お其候其為其加用其勤
取付私換不出來之節其以用を以て其候
所後被仰付其候仕候其廣業中其候其候之其候
中其候以上

津濱萬次郎

右之通子附申渡万次郎より申上其候其候其候

各首

申上候如何可申渡所載以市知事伺候以上

文久二年戊寅八月

江川左郎右衛門

備勘定所

同九月九日在島廳吏議之ヲ移民ノ方法ヲ定ム

- 一 百姓共控管人之用並左郎右郎一五人養子
- 一 理取辦以用年ニ買取物ニ付年寄役中付外
- 一 百姓共一回之取済トモ為公持一ヶ月養子
- 一 養子歩下、島海子高被下共事

一出稼之田本控破忠古未候一人穰之要付

- 一 多クテ出稼骨折取勤者ニ付一日養子
- 一 之外別出所子高ト一丁先一ヶ月程之名込
- 一 下下養子被下共事

一出稼一回米麦取交食用為致候様ニ無事在

- 一 稼人之義ハ士島お下も米版与已食用致
- 一 一麦版種深之種物出所共一鉢米麦取交
- 一 被下共様リ、与持被之お成且食料多分也
- 一 其之義ニ付候様之上取相渡候要者共麦
- 一 版在種取、古手数も取掛最前取極節也

昭誓一人お務め務之要一同お働務間雨天
等之節之麦お用喫原羅飯お用之末お用
様仕立お務得中想人様之因一末壹升増被
下務得之宜安旨物之扶お付増被務可
酒方在之通

一日米五合麦五合了

古三瓶酒七人

一日米七合麦七合

木挽 喜人

外一日米壹升再働務お付惣人数
増被一但米麦在指上之共上お酒

一百姓生食料之義麦之方多分之食用為飯供

積り其要感得之外遠方一働之務被麦毎
て之空腹におよひ難保仕無間物之付此
程會困之お賦被上在之通被下務可

一日 米云々五夕了
麦云々五夕了

男女子供お世 壹人

一暑前指被お成被麦毎中虫喰之お成潮濡等
之了手入以多一其得之腐敗之におよひ食用
之相成直共分難耐之お成被旨百姓とも中
出被旨誠尔為指外國人とも飲也其要買受
之旨物少被之のも有之費之も不お成差之
付有為指賣後被事

一 本 應 爲 所 持 鑄 造 船 以 應 治 作 付 及 其 船 隻 所
下 之 不 幸 務 須 付 荷 物 運 送 中 途 七 水 災 後
至 此 外 諸 人 用 苦 難 下 其 持 取 預 及 出 洋 之 七
上 者 之 裁 私 意 但 其 持 取 鑄 造 之 否 暫 之 以 爲
一 本 官 則 上 一 德 際 應 義 自 分 荷 物 運 送 之
出 來 並 張 義 然 亦 奉 存 珠

一 鑄 造 之 向 海 運 用 航 海 之 可 以 及 在 不 黨 內 之
其 苦 之 持 取 作 法 亦 出 航 小 至 至 島 之 可 以
之 重 而 和 以 體 作 控 及 其 用 在 勤 務 亦 亦 至
り 半 一 鑄 造 之 出 航 可 以 及 公 持 之 出 中 張 大 及

持 取 一 年 程 之 出 仕 出 之 在 案 之 於 奉 存
及

一 鑄 造 者 之 在 其 船 中 之 可 以 及 其 所 持 之 鑄
池 鑄 者 亦 在 池 中 之 及 其 出 洋 之 出 仕 及 鑄
長 在 間 半 亦 有 十 一 二 間 位 者 之 在 池 三 榜 之
り 三 之 榜 位 之 出 仕 及 其 出 仕 鑄 者 之 持 取
如 之 出 仕 入 之 付 西 洋 之 出 仕 及 其 出 洋 三 十 一
二 之 榜 位 之 在 案 中 及 其 鑄 者 之 出 仕 不 可
及 其 出 仕 鑄 者 之 出 仕 及 其 出 仕 七 榜 之 以
鑄 者 之 出 仕 立 可 及 其 出 仕 鑄 者 之 出 仕 鑄 者 之

内 務 省

沖價位：如左ノ如

一 都倉恒大漁者之原節一一年、二、三、十、廿
一 沖及古平漁、之沖及

一 原節中ノ原節恒派之義是迄南人共上リ

水更ノ善也及与リを以て中ノ原節也可有

之在原沖者夫より引下ケ原節也也如左ノ

四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

以て分一ノ、之波下矣る七原節也也可有

五 沖及古平漁、之沖及

料高、之沖及

所圍、之沖及

者、之沖及

素、之沖及

一 種漁、之沖及

冬、之沖及

口、之沖及

中、之沖及

者、之沖及

中、之沖及

内、之沖及

戊九月

江川左近石橋

水又枯料牛介形申請入用

十一月後
一急込百五拾九兩余

録送道令不足十分取受之計也

一急込百五拾九兩余

申請

其方儀主附所夢陰符橋中溪万以次蒙小笠原
島江録漁元介乃取用其津形古蒙取船江乃章
但差也取程り中酒至取受氏否此後五村松溪
平歸塵取而持初法信之令船二一録送乃治取

横岡古江取乃交否次牙出帳可治与万以印へ
可中治取

戊十月廿二日

古川惣抄治方申請

同月中朝陽橋ノ水夫追々ニ死スル者五人各前
ニ死者ヲ埋葬セシ奥村谷川ノ奥ニ埋葬ス

同十月九日在島廳吏檢地シテ移民等ノ畑地ノ
割典ノ其地如左

内務省

一北管塔最子用製出来核付出来其協和

子八百九十坪此烟方三畝日

一同改次川添之分十一人、割添

山子四百坪此烟七畝五畝

一同改隣り地不十一人、割添

山子四百坪此烟八畝

一扇湯西子山烟用製核付出来其協和

千四百九拾三坪此烟四百九畝

ノ八千四拾七坪

同廿六日魯西亜人指揮役レヨンスレンロリス

同國蒸氣運送船ノ水夫ウ井ルリスミツ同船

ヲ脱走不因テ小笠原島中搜索捕縛ノ依頼且同

船中重病ノ者二名快復マテノ間上陸加療ノ許

可等兩條ヲ依頼ス其書如左

ホルトロイド山杉千八百六十二年五月十

七日

一拙者指揮役多ク魯西亜アモールコムブ

附屬之蒸氣運送船サントレヨトーレリス

水夫之烟塔人ウ井ルリスミツツウチヤ志

本自十六日出家以多一語義ホルトロイ下
の多権一告知以多一語義ホルトロイ下
錦方之役人の助力を以て以捕拙者中
おめて拙者又去士官共の身一以逐一様下
にお務め若一語對以多一語一何様以
計少一以名捕拙者不苦快
一重病之者為人祈申之有之至徳就海為救快
而之可及為急務留拙者請事お添高所一引
結し中お物多生快勝以多一語一様以配下
以善業被下留後成相伺快

此款款之振以聞厚之お成快了、魯西亞政府
之幸之也之也

貴下従者
格押役

レヨンステンロース

ホルトロイニ在ル

日本全権一

就右小花作之助直之ニ許可ノ書ヲ贈ル

ホルトロイニ在ル千八百六十二年十二月十七日

レヨンステンロース君

内務省

一其詳第壹号之書物落字以多一指出本人之
倣之可或大探索可致也

一病人之儀之當島在位之もの、中めて引換
其その由之其の、住居之義之義許可申換

小花作之助

同廿九日在島廳吏檢地ノ上コルリンス居宅ヨ
リ奥村ノ方隣濱ノ地ヲ貸與へ開拓サセシム其

證書

於無人島子八百六十二年第十二月二十日

一私義スモ一レビ一子ニ有之檢地面壹ヶ所
日本政府より租借仕換儀相違母以並以右
以入用之而之海上可仕換

レヨ一ヒフコルリンス

同十一月十九日先是中濱万次郎鯨漁中心得ノ
伺書ヲ出ス本日指揮ノ令有リ

私子附申候萬次郎陸屋上 鯨漁船一
番船小笠原島に被差在申付心付方
其外之義之付申上候書付

今級誠後國村松濱平野廣義所持船以陸上ヶ
右ノ島縣漁船被換私系船小笠原島に被差

其狀、付公將方其外在、中上以

一、平野廣義所捕私作廢上、私系強被付録

漢として小笠原島一被善是快版浦賀以番

所、以達方蘇津、浦、石以解流、上、下、快

極仕交奉存快

一、出帆後自然達難風波、私破損、若出、其快、節

之、其最寄都宮宮發港、入津、私捕、上、纏、後

若加、一、極、仕、交、奉、存、快、相、苗、入、用、急、以、後、相

車、極、仕、交、奉、存、快

但、市、村、其、外、界、上、物、等、多、分、二、抄、成、以、後、之

用、急、三、而、不、是、以、多、一、纏、後、出、其、其、快、節、之

仰、料、之、以、代、官、私、録、之、録、之、一、懸、名、之、右、之

上、入、用、極、其、外、有、個、其、出、場、所、より、中、上、以

若、國、交、纏、後、若、加、其、極、仕、交、奉、存、快

一、之、海、少、お、わ、丁、急、担、之、因、病、私、苦、有、之、其、高、之

最、寄、私、系、寄、其、處、寺、院、一、埋、葬、致、一、地、方、遠

之、大、洋、中、之、お、わ、丁、死、亡、之、其、之、快、節、之、地、宜、次

才、取、計、其、極、可、仕、存、快

一、地、方、之、三、而、捕、漁、致、一、其、得、之、其、最、寄、港、口、入

津、録、因、之、入、私、之、上、賣、粉、油、香、等、之、之、當、持、油

月 各 首

ノ其様仕立存候

但ノ札廻抄方ニ依テ以料去所代官私候
去版主地頭ノ掛合立合之由ノ一末ノ掛
始末歸府之上申上其様可仕存候

一 急廻ノ因病人又去怪我人者之地方近之候
得去者寄港ノ入津上陸養生差加ノ止候以
年一其御方相商之様儀代相拂其様可仕存
存候

一 安政四未年迄番君洋形以取ノ私急廻小笠
原崎番寄一為鯨漁所御免而法製作以海取

成其鯨漁通令當時以軍艦方以願之分同要

一 以違之上取白相借与仰付其様奉存候

一 鯨漁ハワテテテ或艘新製以打立以海ニ打

取其様仕立者之以当地之義本村外格別

高直様之出船前問隙ニ有之奇可相候也

伊豆其外控迄之場ニおありて打立其様仕

立候以上取打立以入用急以下テ後可取下

候

一 鯨漁差入候油桶五百程以買上以後お取立

其様仕立存候

一 廣義形、医師幸人為棄絶、公事存候

中濱万次郎

右之通年附申渡百次郎申立候、付法中上
考以上

戊十一日

江川吉郎也門

以初定所

書面九ヶ條之内違之義、令子知医師為急但
扶養之親友沙怙、其候伺之通、相入へ候

戊十有月十九日

昭四斗移、之義、去用金之内、之買上之候、

同三年 清同治二年 洋千八百六十三年 正月七日移民及上出稼

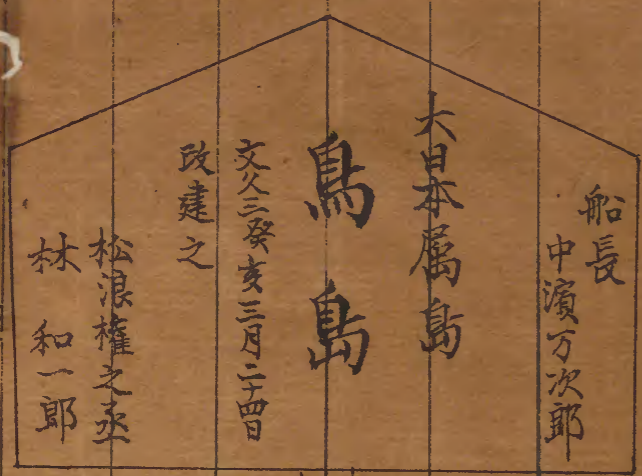
職人等ノ休暇ヲ改正

一 百姓共義、昨申申立家作、其外、之極も、
之、其付来、中付、開墾方仕事、苦勞、
故、一ヶ月之内、六日、休息、日中、
最、早、持地、亦、
耕作、之、子、都、台、も、可、
其、義、之、相、止、其、事、

一出程大ニ市挽船方其是少丁前同極休息
 鳥鯨其岸音雨天焉々而無修義為相休其象
 也者之其間六ヶ月之休々而古休事も不極
 西其間以來古程日十五日廿八日三ヶ月之
 休息日ニ致一其事
 右之通百極ま々江中後

同月九日平野船鯨漁トシテ船長中濱萬次郎乘
 組着港滞船鯨漁ス林和一郎松浪權之丞同船
 シテ出行ケリ此時小笠原島乾ノ方二一小島ア

ル二至ル全島總テ岩山頗險阻更ニ平坦ノ地ナ
 シ島中藤九郎鳥群レテ入ヲ恐レス鞭ニテ討拂
 ヒ行程ニ集リ居ルト云各上陸シテ左ノ高札ヲ
 建歸レリ此頃鯨魚ニ尾ヲ獲タリ



但シ亦品ハ六分板ニハ亥一尺板亦三板ニテ
 差立用意ニテ持參致其事

同月廿一日去年十月十日小笠原嶋ニ於テ在島
人ウ井ルエムギルリ一暗殺セラル、ノ音ヲ訴
フニ依リ直ニ其殺人心當リ探索ヲ命スト云ヘ
氏因循シテ答ヲ為サス數催促ニ及ヒ結局本日
於平野船一同呼出シ相糺ス所左ノ書ヲ差出ス
於無人島第十一月廿六日

一ウ井ルエムギルリ一義廿六日夜何者之所
業ともふお分刺傷取られ廿七日物死去仕
無ク付廿八日埋葬仕無義相遠世也無其右
ニ付私共逐一吟味仕務受シヨレケン子ト

一マススミス兩人之内、可有之存歟

シヨ一ケホ一ツン

ナスアニールセーラリ

ト一マスエツケウエフ

シヨンフラウラー

為澄播一回記名仕歟

同三月十九日亞國ノ鯨漢船乗組ノ水夫脱走ル
ニ及ンテ船長ヨリ其者捕縛及ヒ罰罪請求ノ書
ヲ小笠原島役廳へ差出ス

於ポルトロイト千八百六十三年第五月六日

ホルトロイトの事

日本金権考下

君

一、シーエツチデウ井ス、ジヨージエムスラー

ブルス系アルヘルトルアイムスと申三人

の水夫私括揮以多一、船エヒギル船より出

奔以多一、船付有之者、以召捕三ヶ月之

間、船一、船業以申付以、船被下、船相殺、船有之

私當港、船再度之、船外水夫、船共之、船戒、船も、船お、船中

安法、船酸、船勝、船有之、船狭間、船右、船船、船使、船使

貴下之、船恭、船謹、船従、船者

西、船采、船利、船加、船合、船衆、船國、船之、船因

ニウベトウラルト船仕出

エヒギル船長

エベシチエフナイ

同月中前ニ、船亞、船國、船鯨、船漁、船船、船ヨリ、船訴、船出、船シ、船三、船人、船ノ、船水、船夫、
等、船白、船首、船ス、船仍、船ラ、船一、船通、船リ、船詢、船問、船ヲ、船加、船フ、船ル、船ニ、船其、船根、船原、船ハ、
士、船官、船ノ、船苛、船酷、船ニ、船出、船ル、船ヲ、船以、船テ、船法、船ヲ、船敗、船ル、船ハ、船其、船船、船法、船ニ

對し不輕事トイヘトモ 皇國ニ罪アル者ナラ
子ハ以後ヲ説諭シ船長カ所請ノ罰罪ヲ免シ島
中滞在ヲ許シ兼テ所定ノ規則ヲ讀渡シ請書ヲ
為サシム

ホルトロイトム於ラ千八百六十三年第五月

一私共儀工ヒキル船附属之水夫々有之者受
士官之ものとも取扱ふ宜同船より出奔致
し日本全權一巨細自辨致し其義お遠世以
て其船之變私長ナクより法ニナキニヶ月
の間日本人之為ニ嚴重ニ業有致以戒致下

其條以書面中務登其條仁惠を以添免
ニお成程有存致然る上ニ尚島居留中
西洋人之關係七一尚儀規則お守可中致

エドモンドエムラウ井ス

ジョエワチスラーフニス

アルベトルアイムス

同五月朔日同島退帆林和一郎松浪權之丞阿部
將翁等乗組歸府ス

同九日朝陽艦三度小笠原島へ着港ス先是去年
八月廿一日三郎島津久光後任大隅守
叙從二位勅使護送
ノ驛路東海道筋武州生麦村ニテ其從士等英人
ノ無礼ヲ怒リ斬殺ス是ガ為應接數回遂ニ英國
ヨリ數艘ノ軍艦ヲ差渡シ公使驟リニ償金ノ論
ヲ主張シ事機ニ依リ兵端ヲモ開クヘキノ景況
ニ至リ既ニ事情迫切ニ及ヒシカハ長崎箱館ホ
ヘモ令ラ下シ專ラ兵備ヲ嚴ニシ海防ノ準備ヲ
為サシム此時ニ當リ各國雜居ノ離島へ僅ノ人
員ニテ官吏ヲ置且移民ヲ其儘ニ居ラシムルハ

釜中ニ奠ヲ放ツニ似タリ加之隔遠ノ孤島開拓
モ容易ナラストノ議論サヘ起レリ是ハ小笠原
島再ヒ開拓ノ議ハ安藤信行ノ主張セシ所ニテ
專ラ其事ヲ裁判ス然ルニ去年四月信行カ職ヲ
罷尚十二月ニ至リ前掃部頭井伊直弼カ領知ノ
内十萬石ヲ減シ紀伊守内藤信親カ所領村替田
地ニ復シ下總守間部詮勝カ所領一萬石ヲ減シ
隱居謹慎若狹守酒井忠義相模守堀田正篤及ヒ
信行等共ニ蟄居正篤ハ所領一萬石信行ハ二萬
石ヲ減スルノ嚴令アリ如此柳營ノ處分掌ヲ反

ス如シ人権勢アル時ハ人僉之ニ諂媚シ一言半
句ノ誹難スルモノナク権勢ナキ時ハ忽善事モ
悪シク難論スルハ澆季ノ人情百事彼徒ノ指揮
セシ事ハ議論アル半ナレハ小笠原島ノ開拓ハ
無益有損也ト評判喋々亭片時モ早引戻スヘシ
ト令シ直ニ艤シテ品川海ヲ出帆航海本日父島
ノ港ニ入歸府ノ令ヲ傳フ忽卒歸府ノ準備ヲナ
シ移民等ヲモ引纏先扇浦ノ廳舎及其他在番諸
吏ノ邸宅ヲモ在住ノ島民ヘ分與フ部屋四房一
棟長六間梁間二間半ヲセーホシヘ元役所三間

二二間半一棟物置一棟並クイ船一艘共ニウヘ
ブヘ應接所三間ニ二間半一棟ヲラホーヘ齋藤
源藏住宅二間半二間一棟コルリンスヘ山添大
物置七間ニ三間一棟海岸在来物置一棟共ニレ
ツワヘ平野家三間四方一棟ヲラホー忰ヘ医師
宅二間半二一間一棟奥村ナルシヤークヘ兼太
郎居住二間四方スミスヘ同人火焚所シヨージ
ヘ板屋百姓家三間半二二間ヲヲラホー二男ヘ
外出稼小屋鍛冶方小屋物置臺所等五棟境浦十
ルセヨーセフ奥村ノセヨーテヒジヨーペーハーシ

ヨシカナカ人チヤレ等へ與へ其他大形押送船
二船船其帆モ父島セーボレ、ウエフ、ブラホー以
上三名へ與へ小形ノ澳船船及船具ヲ添但帆ヲ
具セス是ハ母島マワレへ前三名ヨリ傳へ與フ
ベキ旨ヲ托シ最前平野船ヨリ買上置シ古ホー
ト船一艘ヲモ同三名へ與フ且米麥合テ二百俵
程大豆五十苞小豆十苞水油八樽其外庖厨ノ諸
器具等ハ夫々分配スヘシト達シ分配方男一人
ノ分配高ノ半減ヲ女子小童男女ニ至ルマテ人
員悉皆二分與勿論也ト説諭シ尚昨年八月中セ

ムスマワレヨリ所取置ノ證書ノ横文ハセー
ホレへ托シ序ニ返シ與フベキ旨ヲモ談シ植付
草木養培等ハ懇ニ遺托ス此時廳舎ノ蹟ヲル
イスレワワトニ托シ左ノ保状ヲ出サシム

於二見港子八百六十二年六月廿七日

一松義利益之多忽府浦小お之之地面一ヶ處
お借仕共義相違母以是後は後日本政府よ
り賜差圖之之其迄賣拂申問表候

ルーイスレワワ

於二見港子八百六十二年六月廿七日

一日亦金権より私共一建家名料其外當島江
以然之右成其統昂被下至此之項載仕使破
船以多一又及船泥快日本人士其亦國一
便私有之故止万事扶助可仕快且右碑即本
并墓處等生可成其心附大切之書獲可仕快
此書島民連署ナレベケレト小花カ筆記中署ヲ
脱ス然ルニ前ニ載スル所ノ書中私共へ建家食
料其外當島ニ御殘ニ相成矣諸品被下置造ニ頂
載仕委云々ト見ヘタレハ一名ノ書ナラヌハ論
ヲ俟ストイヘトモ其名ヲ知ルニ准據ナケ
レハ姑ク原本ニ隨ラ交名ヲ記シ載セス
邊ノ退去頗ル煩雜ヲ極ムトイヘトモ兼ラ島中
要置ノ事件未タ裁判ヲ為サレモアルヲ多忙

ニ紛レ打捨出發スベキナラネバ夫々處分ヲ決
メ裁判ス其中ニ元アルニルリニヤムプヘ附
属スル處ノ地所ト一マスエツケウヘブヘ讓與
ヘシ旨ヲ訴へ出タリシヲ未タ許タノ證書ヲ通
興サバリシカバ此時左ノ證書ヲ授ク
於二見港千八百六十三年第六月廿七日
元アルニルリニヤムニ屬一其地所ト一マ
スエツケウヘフニ讓受付持地ニ相違望ニ扶
依之拙志記名叙快

二見港ニ於テ

内務省

日本全權

小花作之助

去年八月江府ヨリノ下知ニヨリテ田中廣太郎
立合セムスマツレシヨリ證書對照ノ上横文
ヲ取置シカトモ今般在勤一同引拂ノ台合アル
ニ因テ官廳ニ預リ買シ本書ヲ交還スヘシトセ
ムスマツレテ徴出シ序ヲ以テ本人マツレシ
ヘ其旨ヲ傳達シ返シ與フヘシト演達シ左ノ翻
譯文ノ原書横文ヲセムスマニ委託ス

千八百六十二年第九月廿七日

日本政府役人白

拙者セムスマツレシ義十九ヶ年程在島羅
在然ニ變テ程症病相感候ニ付氣候相變候
場所ハ福任以多一返就テ拙者并附屬之者
共立退候多免便船取テ次等拙者所持之品
日本政府ト旁拂申込存候在價ニ付トルテ
此ニ看之候
自然拙者取去以多一換ツテ妻ケツテ井一義
同様取計ニ申候

内務省

セームスマワレシ

總テ移民共ノ開拓スル地既ニ八千坪ニ及ヘリ
是モ僉在島外國人ニ委ネ事全ク整ヒ小花作之
助益田鷹之助原又吉堀一郎及ヒ八丈島ヨリノ
移民男女トモ引拂ノ準備邊ノ事ニテ百事忽卒
也トイヘトモ漸調度ヲ取揃ヘ同十三日第十二
時小笠原島出帆同十九日朝八時浦賀着港翌日
日歸府ス

同七月伊豫守菊池隆吉稟状ヲ捧ケラ小花益田
松浪ノ三士及ヒ雇醫師河部将翁等カ賞典ヲ請
フ

小笠原島開拓初發トリ在勅
仕安志所鷹美等狀書付

菊池伊豫守

支配定役元メ

小花作之助

同定役元メ助

益田鷹之助

同同公

内務省

松浪権之丞

右之者義去己酉年十二月水野下總守殿部長
門守伊豆國附島々以備向取調且小笠原崎比
開拓以備被仰付并裁裁節石造社海中流以每
一在場所改新規泊港も同様之而猶之室風浪
甚之折柄死生難斗程之憂無恙小笠原崎江着
以多一風雨險阻尋不相厭險山荊路跋涉野宿
尋仕在島外國人も不之入揚之也も罷城金島
見分取調物等抄取取之付書面之者共以開拓
節取扱と一之善殘憂去春中下総守外支配向

之者一同御府仕候要者召通御り共支配向江
去前書之慮之要未利加國之罷城共以開拓之者
より辛苦遙之相増取扱取以以應義之義下總
守長門守より申上昨年中末之以應義被下至
其義之有之御之要事面之者取去前書切當也
之務上輕細海之孤島一居持以開拓向取計以
國威不失様在島外國人も在も要是以多一且
去戊八月申八丈島より善後共福民并出稼人
とも善配仕居小屋取建方を始免麦畑切開草
葱屋外培養方形規蹴物試造之小船取建等之

也為仕多般一卜先以子引相成其南島永統
之奉承厚く心懸相勸一昨年より當後より云
々年城幕倉不自由之艱苦不相厭孤獨在勸仕
其殿不容易辛勸二付出格之此磨美被下益以
振仕反幸存扶依之此如草物扶

歐羅巴法心一在城女去配定後元以助之磨
安之志知推而一並之因以格持方五人格
持同定格一志被而因斷以格持方五人格持同
同志一志被而因斷以格持方五人格持同下

以上

亥七月

下ヶ札

去に成十一月本文作之助之義士支能定役
元ヶ助より同元ヶ助之助義士同定役より
同元ヶ助新体付矣

小笠原富一ヶ年詰り在醫師
以鷹原幸次書付

兼池伊豫守

以在醫師

阿部将藏

内務省

右之者義去後支能調役田中廢去即八丈島、
 而後民出稼人相撰小笠原島一連後務部呂達
 孫越其變至次麻痺并暴瀉病流行之折柄別股
 骨折醫師之土地、付年來煩居此病療治難出
 疾之のまゝ極業政一遣一其後小笠原島一相
 治在初級、移民出稼人等不快之節、勿論在
 島外國人病象多ても業用年歳仕生上重而本
 業學本業之、付南島、毎々樹木枯没變
 分培養、而仕新規築物試造之義も同人相心
 得之話、以多一進、以益之可也、或書中、於一
 々年之間、不自由艱苦、不也、或書中、於一
 野下、殆皆一回、被遣、疾寄、合、以、醫師、莫、敢、懇、願、小
 野、答、廢、一、も、為、以、廢、義、急、或、被、時、服、二、口、被、下、疾
 間、將、能、像、分、も、遠、右、以、見、右、も、右、或、重、無、得
 と、も、子、實、之、於、了、初、切、艱、苦、也、答、廢、より、も、右、増
 吾、身、義、之、付、右、相、當、之、以、廢、義、被、下、墨、其、様、仕、成
 其、存、疾、依、之、此、如、也、歎、無、以、上

亥六月

同十一月下野守竹内保徳伊豫守菊地隆吉連署
シテ小笠原島開拓費用ノ殘金未算当決セスト
ノハ氏先金藏へ返納セシメテ請フ

小笠原島開拓費用ニ付諸島及開
拓金并洋銀五拾五萬圓ノ義中ノ書付

竹内下野守
菊地伊豫守

諸島及分洋銀五拾五萬圓分其諸島
諸島分洋銀五拾五萬圓分

一 金五千九百九拾四圓五匁永百五十四文
此金上納可致方

諸島及分洋銀五拾五萬圓分其諸島
諸島分洋銀五拾五萬圓分

一 洋銀七万三千五百一拾三千四百七十一文

諸島及分洋銀五拾五萬圓分其諸島
諸島分洋銀五拾五萬圓分

外洋銀四千九百八十五圓十文七厘

右小笠原島開拓費用ニ付先般水野下総
支那部長門中務省事務局長金トシテ諸島
内米麦等外諸品以買上代並去成ハ年中ハ大

島より福民並出稼大工木挽職等も以差後之

前諸島分當款用意之家具農具代祖家在外諸

品以買上代且昨年才於小笠原島在島之役之

ノ而而扱扱外國人ノ被下島以買上代應得銀

等之を拂括洋銀トモ有之巨細因詳帳

面調中上共積リ之而最早面調方也其書按

面調中上共積リ之而最早面調方也其書按

変此程之書上之而右書紙不殊悔矣仕缺之付
猶存烟方之追之可仕書得共一時急遽之生何
分取分重其様取等り且又彼島は彼を其役之
之内洋銀昔持紙不申ドレラニ通用之土地紙
之紙方之書支紙之付一時探智相借為仕缺分
も其之右を歸府後更之返納方面確め其管之
之扶得共物價所圍内と遠以不辨之上格別高
價之留之而難治仕書上紙之其給之去とも
与返納方延引之取成紙に要右之外お給り若
扶以金洋銀とも書面之通者之用違三井八郎

右協門方へ願呈其得共此程同人定端失仕之
り手薄之措而之善為扶も此節柄紙為之与中
出取之次第も其間遣拂共巨細因得帳之義
之右個出来次第可中上紙得共書面之書高此
節以急意之上納仕反此之書筋定事灯は被作
後可被下紙依之此版申上紙以上

亥十一月

同月十五日酉ノ刻前江城本丸潮見坂番所後留
守居番部屋脇飯方詰所ヨリ出火本丸及二丸
時ニ火移リ猛火焰々消防ノ術無ク大將軍モ吹

上へ動坐事急ニシテ奥向ノ宝物重器ヲ始調度
雜品多クハ灰燼ニ屬シ中ニモ惜ムヘキハ諸有
司ノ各局ニ備置ケル古今ノ書史内外ノ記録往
復ノ書牘等日勤ノ諸吏退散ノ後僅ニ宿衛ノ者
而已火焰ヲ潛リ烟ヲ吞ミ千辛万苦持出スモノ
若干也ト虫氏盡クスル間ナク祝融ニ罹ルモ
カラズ小笠原島ニ關係ノ書類ハ一葉半紙モ殘
ルモノナク食鳥有トハナリシ也小笠原島開拓
再興ノ台命アリテ其事務ニ關ル者ハ南島掛ト
唱ヘ一課ヲナシ彼島嶼ニ係ル事件ハ内外ノ往

復ヲ始メ大小ノ事務盡ク南島掛ニテ取裁スル
ヲ以テ各國公使領事等トノ往復書翰取扱記及
書翰留等モ別冊ト爲シ外國事務平常ノ記録ト
合綴セザリシカバ今小笠原島事件ノ書類ノ傳
ハラサルハ此火ノ災ニ因テ也抑江城祝融ノ災
厄アル事本西兩城總テ十一度當城基立ノ權輿
ヲ温ルニ

後花園天皇ノ長祿元年
明天順元年 洋千四百五十七年 鎌倉ノ管領
修理大夫上杉定政ガ長臣左衛門太夫太田持資
入道道灌創テ築城以後連綿今ノ東京城則是也

先是道灌ハ當國荏原郡品川ノ館ニ在シカ此頃
關東蜂ノ如ク乱シ下總ニハ下野守東常縁兵ヲ
起シ陸奥入道馬加光輝ヲ討伐セント馬加ノ城
ヲ攻メ上総ニハ武田入道兵ヲ舉ケ廳南鞠谷ノ
西城ヲ經營シ楯籠ヲ國中ヲ押領ス安房ニハ刑
部少輔里見義實中村ノ城ニ在テ隣國騷擾ノ虞
ヲ窺ヒ國境ニ兵ヲ出シ所々ヲ侵害ス築田河内
守ハ關宿ヨリ討出武州足立郡過半ヲ所領トシ
市川ノ城ヲ乘取り兵ヲ籠置尚近境ノ形勢ヲ觀
鑿ス上杉方ニモ三浦ハ義固ハ本貫三浦ヨリ起

テ相模國岡寄ノ城ヲ取テ近郷數ヶ所ヲ押領シ
大森安齋ハ竹ノ下ヨリ起リ小田原ノ城ヲ取立
足柄郡ノ地ヲ畧ス又武州ニテハ上杉武藏入道
性順其男右馬助房憲父子人見ヘ討出上杉ノ味
方ト謀シ合セ深谷ニ城ヲ築シカハ左馬頭成氏
之ヲ聞驚愕大事也敵ニ足ヲ溜サスベカラスト
鳥山右京亮高山因幡守等ヲ先鋒トシテ出張サ
セシム上杉方モ勢ヲ岡部原ヘ繰出し烈シク鬪
戦ニ及セシカトモ遂ニ上杉方敗シ井草左エ門
尉ヲ始久下秋元ノ人々其他ノ逞兵殘少ナニ討

ナサレ成氏方モ軍ニハ勝タレ下モ大将島山モ
深手ヲ負ヒ乱軍ニ討死シケレハ軍ハ是迄也ト
引返ス上枚方ハ新田岩松小五郎金井新左衛門
以下新手加リ再度ノ合戦ニハ成氏ノ軍敗北足
立郡へ引返ス如此両野房總武相ノ六國一時ニ
修羅ノ衢トナリ何時不虞ノ變アラレモ計リ難
シト修理大夫上枚持朝入道ハ武州入間郡川越
ニ城ヲ築キ道灌カ父備中守資清入道道真ハ同
國埼玉郡岩槻ニ城壘ヲ營ミシカハ同時道灌モ
豊嶋郡江戸ニ城地ヲ開キ康正二年經營ニ係リ

翌長祿元年四月ニ至リ落成此時河越岩槻兩城
モ全ク成功シタリケシ鎌倉大双紙ニ同時築城
ノ事ヲ載タルヲ以テ知ルニ足レリ却說道灌ハ
新築ノ江戸城ニ移リ此ニ居ル事三十年城中ニ
燕居ノ室ヲ造^イ宮^{ナミ}南軒ヲ靜勝ト号ケ東軒ヲ泊船
ト呼ヒ西軒ヲ含雪ト稱フ道灌ハ文武俱ニ長シ
志モ優美ク和歌ヲ善ク詠タリ家ノ集ヲ慕景集
ト号ク斯文事ヲ好ムヲ以テ万里居士ヲ江戸ノ
城ニ招キ入居士山水ノ眺望ヲ稱揚シ窓含西嶺
千秋雪門繫東吳万里舟ト古人ノ詩ヲ引其美景

ハ江亭記中ニ見ユタリ此年間扇ヶ谷ノ上牧定
政山ノ内ノ兵部少輔上牧房顯互ニ權ヲ争ヒ間
計ヲ以テ定政ニ道灌ヲ疑ハシム定政思慮薄ク
其間計ニ陥リ人ヲシテ道灌ヲ浴室ニ刺シム是
文明十八年其後定政カ子同氏五郎朝長同修理
大夫朝興共ニ相續キラ江戸城ニ居リ專隣國ニ
窺ハレシト守リシカドモ

後柏原天皇ノ大永四年明嘉靖三年正月十三日
洋千五百二十四年

左京大夫北條氏綱カ為ニ落城シ朝典ハ川越ニ
敗走ス自是後ハ氏綱カ富永神四郎遠山四郎左

衛門等ヲ城代トシテ此ニ居ラレム氏綱カ男左
京大夫氏康其男左京大夫氏政其男左京大夫氏
直ニ至ルマテ四代ノ間ハ北條家ノ持城タリ此
間遠山富永兩家守リ居タリシガ

正親町天皇ノ永祿七年明嘉靖四十三年
洋千五百六十四年太田新

六郎康資兄弟小田原ニ叛キ同苗美濃守資正入
道三樂齋ニ謀シ合セ安房守里見義弘ト同シ下
総國市川ノ城ニ楯籠リシカバ北條ヨリノ討手
トシテ遠山丹波守富永三郎左衛門北総國府臺
ニ向ヘ進軍其圖ヲ失ヒ却テ敵ノ計策ニ陥リニ

人共ニ討死ス然レドモ氏康父子小田原ヨリ馳
來リ大ニ鬪戦シ三樂義弘敗シ北條ノ軍勝タリ
シカハ江戸ノ城ハ異ル事ナク小田原ヨリ之ヲ
守リ北條治部丞遠山左衛門等城代ヲ勤ム
後陽成天皇ノ天正十八年明萬曆十八年 豊臣太
洋千五百九十年閏兵ヲ出シ北條カ居城小田原ヲ攻ム此時遠山
左工門佐景政ハ小田原ニ竈城シ其弟河村兵部
少輔同甥遠山丹波守江戸城ヲ守リ居シカドモ
北條家没落シ關東ハ々國ヲ徳川氏ノ所領ニ興
ヘラレ江戸ヲ居城ト定メ同年八月朔日入城ア

リシ也事跡合考ヲ考フルニ江戸ハ海端ノ沙入
田畑ナドハ僅ニテ凡八百石許ノ費也ト家康平
日ニ自負セラレシト見ユ岩淵夜話別集ニモ此
事ヲ記セリ友人旧幕臣伴直剛カ家藏ニ享祿年
間江戸城ノ古板アリ何者カ天保ノ末此圖ニ些
作意ヲ加ヘ長祿江戸圖トスルモノハ徴トスル
ニ足ラネト直剛カ藏スル古板ハ江戸城ノ往昔
ヲ見ルニ足レリトスヘシ其頃マテハ市街トテ
モ備ハラス四辺原野渺茫村落疎也天正入國以
後日ヲ重ネ月ヲ追ヒ天下ノ諸侯此ニ參勤シ藩

邸薨ヲ並ヘ市鄺ノ家屋鱗差シテ縦横ノ四街八
百八町斯繁昌ノ地トナルニ從ヒ柳營ノ殿舎漸
々ニ造營セラレ本丸二丸三丸西城等大厦高堂
陸續ト建列リ

明正天皇ノ寛永十一年

明崇禎七年
洋千六百三十四年

閏七月廿三

日軻遇突智ノ神ノ荒暴アリテ本城火ノ災ニ灰
燼ト為レリ長祿元年當城創築ヨリ此年マテ百
三十四年ノ間祝融ノ有無ヲ記録スルモノ無し
ハ詳ナラネド入後以後四十五年ノ間二火ノ災
ナカリシハ確也然ルニ僅六年ノ後同十六年八

月十八日又火アリ夫ヨリ十九年ヲ過

後西天皇ノ明曆三年

明永曆十一年
洋千六百五十七年

正月十八日

本郷丸山本妙寺坂邊ヨリ出火此火ノ為ノ二本

城厄災ニ罹リ又九十年ノ後

櫻町天皇ノ延享四年

清乾隆九年
洋千七百四十四年

今年五月

皇太子ニ御讓位アラセラレ

桃園天皇御代ヲ知シ食シカドモ未夕御位讓ヨ

リ以前四月十二日西城ニ火アリ其後九十五年
ヲ隔

仁孝天皇ノ天保九年

清道光十八年
洋千八百三十八年

三月十日西

城又祝融ノ災アリシヨリ七年ノ後

孝明天皇ノ嘉永五年清咸豐二年五月廿二日西

城ニ火アリテ殿舎灰燼同十一月廿八日富士見

宝藏出火シ又八年ノ間ハ然ル災モ無カリシカ

同御宇ノ安政六年清咸豐九年十月十七日本城

中ノ口ノ邊ヨリ出火シ倉烏有ト為リ又五年ノ

後則本年文久六月三日芝飯倉五町目邊ヨリ出

火其火飛テ西城ヲ燒キ六月ノ後今度ノ本城

ノ祝融ニ至リ本西ノ二城ニ九サヘニ燒シカバ

一先清水ノ館ニ入ラレ同月十一月廿六日田安ノ屋

形ニ滯坐アリシ也

元治元年清同治二年二至リ再外國奉行連署シ

テ建言ス

南海小笠原島河内藩向
義ニ付申上快書付

外國奉行

小笠原島之義去去ニ酉年十二月中水野筑後

守所同附後部歸一尋以閣拓有被差在築御名

國公使一モ其方以觸違お成既ニ西英公使昔

より同島版圖之義ニ付種々申出被義有之快

得生結句此方新親以軍振ニ相成被義ニ去先

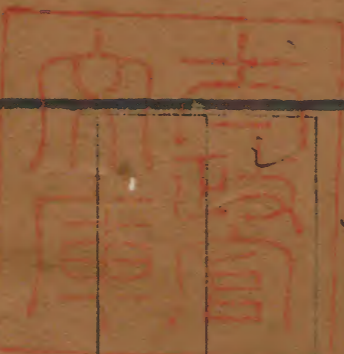
同治元年
嘉永五年
安政六年
文久三年
清咸豐九年
洋千八百五十九年
洋千八百六十四年

小笠原

難を被爲着其姿之相尚彼方五分ノ弱以無以
事成海而可申之辭柄も無く生倭黙止仕其義
之有之持前書兩人陽帆之節支碇向并以徳目
附以小人目附昔回島有縁り之爲善縁一益伍
所叙不并石碑等所建其後八丈民を以所觸一
お成同島支碇之義古以代室江川右岸在門
一被作付同人手附年代之内之有爲お借持様
与作渡渡義之受所其年四月申東海道筋生麦
村にお爲了島津三郎借方之有英人を殺傷仕
決一條之有同國より数艘之軍艦着渡一云使

より倭意之義海の中三事様之寄兵陽をもお
聞き扶縁之景況之有以惣爲ふ女お柄逐之目
島在初之
以下
脱也

可惜此書未本ヲ脱又他日搜索之ヲ補ヒ加フ可



各首



明治十五年九月

校合

阿部 柳助
鈴木 行一



小笠原島紀事 十二

十四



内閣文庫			
一七三函	三三冊	三七七四號	和書類

江州府志

十目

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
...

小笠原島記軍卷之十三

目錄

天文三年春四月

○七月三日侍公役示立原島

○新見十

○新求未翰

○同書翰馬

○同四州

○別前次

○同書翰馬



小笠

原島紀事卷之十二

目錄

文久二年

○七月三日佛公使小笠原島、日本輿地圖

○所見、因行經緯度詳細、且武鑑翻記

請求、來翰、草案

○同書翰、寫、草案、草案

○同西、英、使、書、最前、所、贈、小笠原島規

○則、蘭、文、譯、請求、來、翰、並、草、案、草、案

○同書翰、寫、草案、草案、草案、草案

○同十七日李本國へ開拓報知、書翰並公使
へ委託贈達、報告及遞送料請求、來翰

○同遞送料領收書

○同日佛公使へ過日彼ヨリ小笠原島地圖請

求、來翰、回答、草案

○同廿一日佛公使小笠原島事件、就閣老

二面晤、請、來翰、日本與此圖

○同廿二日佛公使へ面晤、日時ヲ定メシ回

翰、自裁

○同廿七日佛公使兼而約束、如ク此日板倉

○防州力郎、面晤小笠原島來由、説公使

○再々規則書ヲ請、

○同日洋曆茅七月廿五日附十八号同月二十

○同日附廿二号、回答、並彼、請求、隨書

面、翻譯英文、蘭文、直之、遞英人、

○回答、

○同日廿六日忠徳常純、小笠原島巡視、賞典

○同日行、

○八月三日右同斷隨行並軍艦方等、賞典

○同日五日去月廿七日勝静、佛公使、

○對話、時約、港規則、本日外國奉行
 ○名、添書、以、贈達、
 ○同書翰
 ○港規則
 ○同七日勘定奉行ヨリ、
 ○原島、差遣、
 ○右縣、
 ○崖畧書
 ○同移民、賜品目錄
 ○同十五日縣令屬吏、
 10

外國方、
 ○移民之内、
 書、
 ○同廿六日朝陽艦、
 寮方醫師、
 之、
 ○同廿七日去月、
 政府、
 ○同書翰、
 閏八月、

立並井戸新堀等ヲ始遠方地所新墾ハ暫見
 合北袋澤一同伐開南袋澤起迄地味の當ニ
 諸品植殖食料ノ余分ハ勿論今般植殖之果
 物生熟セハ外國人ハ貿易一件或ハ芭蕉布
 織立等ノ業ヲ開キ然レ移民共懶惰不取締
 成戒メ又植付ハ蕃薯ニテ燒酎釀製及食塩
 其肉ハ油ニ製スハキ較計其他魚油、製
 方ハ詮議女子ハ相應手業童男女者芭蕉布
 絲績ヲ教ヘ男女幼老ニ至ルマテ閑居ナ

カラシムハキ音数件ハ下知ヲ傳達ノ覺書
 阿部將翁数種ノ草木果物菜蔬及藥種等ヲ
 携來植殖ハ較計ニテ其所有ノ諸品政府ハ買上ヲ恊
 同四日在民也詳ムス病ニ因リ出島他國ハ
 轉任書就テ其所有ノ諸品政府ハ買上ヲ恊
 願中願書
 同月不詳附田中廉太郎母島ハ渡航同島在民
 マツルハ對談ニ其地ノ便利ヲ計テ移民ヲ
 引込テ渡サシ音ヲ決議ニ出帆然レトモ先

父島一所開墾ノ交功立テ後ト姑比事ヲ止

○同十四日仲濱方次郎君沢形船へ乗鯨漁ヲ

先務シ閑暇ハ通辨ヲモ兼役ニ且捕鯨ノ方

術ヲ移民等へ傳達サセニ事ヲ兼テ上申ノ

取コ口本日許可

○右請書持廻知事諸司是前應上合附

○就右事件並山縣令ヨリ勘定所へ伺書附送

○君澤船小形船ニテ捕鯨不便利因テ別段

○捕鯨適宜ノ船雇入ノ申稟兼太等諸事

○同九月九日小笠原島在留ノ官吏議シテ移

民被殺ノ方法當棄絶此ノテ資熱ハ開墾ノ

○右議院書持廻知事諸司是前應上合附

○同月廿八日先魁並山縣令ヨリ中濱方次郎

小笠原島捕鯨一條ニ對越後村濱松平野庶

藏船兼用ニ對數件之申稟有之本日指冷下

○右申稟書持廻知事諸司是前應上合附

○同指冷日其後小笠原島捕鯨而獨留更番計程

○同月中朝陽艦小笠原島ニ滯泊病テ船中ニ

○死七ノ水主五名各同所奥村谷川ノ奥先前

○死者葬地ニ埋葬

○十月九日在島官吏檢地シテ移民ノ畑地ヲ

分與

○右坪数書

○同廿六日兼テ小笠原嶋へ滞泊、魯船指揮

○設中割其船ノ水夫脱走、報知及島中警非

○違諸使ニ捕縛依頼及病者上陸カ療許可

○同請取之旨在島官吏來翰

○就右小花昨之助並山兩條承允、返翰

○同廿九日在民コルソンス居宅ヨリ奥村ノ
方隣濱ノ地ニ官吏檢地シテ貸與へ開墾ヲ

○許容ス

○右持借證書

○十一月十九日先是中濱万次郎鯨漁中心得

○稟議

○右指令

○又久三并外江

○正月七日小笠原島出張局官吏等議

○移民及出稼職人等ノ休暇ヲ改定ス

○同九日平野船小笠原島へ着港中濱万次郎
捕鯨主宰松浪権之丞林和一郎等移民捕鯨

修業... 出帆島... 至... 同札圖... 同廿一日去年... 九月斗暗殺... 同島民稟狀... 三月九日亞國鯨船... 小笠原島在廳吏、依頼

同書翰... 同月... 島官廳... 子... 同請書... 五月朔... 林和... 連歸府... 同九月... 朝陽艦... 三度小笠原島入港在島諸吏

○及移民等引拂之下知達來關人於本島諸
 ○諸吏退散之崖畧
 ○官宅及諸品諸船殘骸等島民へ頒與
 ○種植之草木藥品等培養之島民ニ遺托
 ○廳舎等蹟ヲルヘシ
 ○同人保狀書
 ○島民等へ授與スル所ニ隊屋及諸品並諸船
 ○等收受且向後小笠原島等困難日日本
 ○便船有之迄扶助スル久將開墾碑及冥福
 ○碑等兩碑並墓地等大切ニ守護スヘキヨシ

○以請書
 ○云云マツレシ出島ノ時所有ノ諸品御
 ○置^買程由申禀高積長存候還^承取^出島人
 ○同譯改日工知本島出島人
 ○移民開拓地^ノ千余坪^ノ在島外國人ニ委託
 ○同付^三和^三朝陽^三港^三在勤諸吏及
 ○移民^一同^一辨^一出^一島^一人^一委託
 ○同^一附^一執^一節^一朝^一陽^一港^一諸吏^一歸^一府^一
 ○六月^日附^詳菊地伊豫守上申シテ小花作之助
 益田鷹助松浪權之丞及醫師阿部將翁力

賞典請以...

○同日申...

○阿部將翁...

○十一月...

○小笠原島...

○同日...

○此時小笠原島...

○元治元年...

○月日未詳...

小笠原處分上申之...

同致狀七 此書未文...

島...

度...

本...

外...

余...

房...

可...

...

實錄卷之十
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

10

小笠原島紀事卷之十二
 同文
 二年七月三日
 島月載
 皇國輿地圖
 度見明細圖
 本且武鑑等
 外國事務宰相
 余小笠原
 房手成
 下以島名

第六月廿一日
 第七月廿八日
 江戸

元及且台下の書^管爰中^管経^管友^管緯^管友^管在^管示^管及^管都
了^管示^管比^管告^管知^管を^管以^管小^管採^管用^管の^管得^管同^管前^管年^管を^管存^管意
を^管述^管入^管及^管説^管明^管を^管開^管の^管事^管を^管得^管以^管我^管政^管府^管必
此^管説^管明^管を^管陳^管言^管問^管ふ^管事^管約^管へ^管し
台下より此書の回答を贈らる事^管は^管此^管文^管付^管の
本^管回^管答^管を^管送^管致^管す^管事^管に^管於^管て^管是^管の^管事^管を^管論^管ず^管る^管
武^管永^管昭^管昭^管台^管下^管諸^管島^管に^管於^管て^管所^管領^管の^管國^管或^管是^管島
島^管々^管精^管細^管なる^管書^管附^管送^管贈^管送^管の^管事^管に^管於^管て^管是^管の^管事^管を^管論^管ず^管る^管
同^管我^管國^管の^管島^管形^管或^管是^管運^管送^管の^管事^管に^管於^管て^管是^管の^管事^管を^管論^管ず^管る^管
心^管を^管盡^管す^管る^管地^管下^管上^管陸^管に^管在^管る^管事^管に^管於^管て^管混^管雜^管を^管避^管く^管る^管

同^管為^管す^管る^管事^管に^管於^管て^管是^管の^管事^管を^管論^管ず^管る^管
英^管台^管下^管年^管小^管英^管五^管の^管経^管緯^管友^管を^管精^管しく^管記^管す^管る^管地^管圖
を^管贈^管ら^管る^管事^管に^管於^管て^管是^管の^管事^管を^管論^管ず^管る^管
し^管は^管地^管圖^管及^管び^管事^管換^管の^管海^管并^管其^管國^管或^管是^管運^管送^管の^管海^管を^管爲
は^管是^管を^管是^管の^管事^管換^管の^管海^管并^管其^管國^管或^管是^管運^管送^管の^管海^管を^管爲
き^管小^管國^管の^管外^管國^管人^管殊^管に^管使^管臣^管館^管の^管事^管を^管助^管く^管る^管事^管
用^管の^管通^管辨^管名^管を^管好^管く^管る^管事^管に^管於^管て^管是^管の^管事^管を^管論^管ず^管る^管
は^管是^管を^管是^管の^管事^管換^管の^管海^管并^管其^管國^管或^管是^管運^管送^管の^管海^管を^管爲
人^管なる^管政^管府^管に^管於^管て^管是^管の^管事^管を^管論^管ず^管る^管
子^管の^管口^管マ^管子^管に^管於^管て^管使^管臣^管館^管の^管事^管を^管論^管ず^管る^管

と見る所は、
毛我國の
為の右
其故
辨名
海島條約
日本在留佛
トゼント
譯

同日過日所贈達ノ小笠原島規則ノ事ニ就テ

英公使ヨリ左ノ書翰來ル

第二十二号

千八百六十二年 七月廿八日

外國事務執政台

本月二十日

領事

規則書

此等

譯

文を和蘭文に翻譯し其年未了後又其後
快ならん
又此島の事を載るる第^外七月廿五日附第十八
号之余の公書の回答を贈り給て人夕を清く
忠惶敬白
不列顛女王陛下のチャルダツツフェールス
イシントキヨシテル手記
第二十二号
ヨオ在留書記官
英公野上正之書簡卷之五
エルエウステン譯
同日盛日ヲ觀盡く小笠原島駐候ノ事ニ係リ

同十七日過日英國公使館ニ托シ英國政府へ小
笠原島開拓報知ノ書翰ヲ贈達セシテ周旋ニ速
ニ進送レ報告及進送料ノ返辨ヲ請フ旨書記官
ヨシノ書翰來ル其書左ノ如シ
一千八百六十二年第^外八月十七日
大衆國使臣館ニ白書ス
以テ外國事ノ水野筑後守以下ノ邊境ノ事
云々
其書を六ルリ
名地
外國事務ニニストル
送るの用故を為人が為め年之迄是下より

法取れり且録呈下不答ハ之を差送るハ
と約法也凡ハ之也。代國市録ニス
迅速ニ申上且綿密ナル因旋に法セ人ガ為メ
年横濱何ヲ躬以法多難為也又此回和御侯
お拂込新法也又政府不モ此法別ニ違不
のらさるを注意せり
於テ系録書状賃又キシトルラ十四個四
半セシ時ヨ言を拂込ナリ
此書中其法取事をお入ノ送下或ハ足下
同代人より此言を系録通達ト録用スルと格

已きりな里教自制也此法也
大凡西ノ地ハ迅速ニ送込入ル状賃十四トル
より法取れり
一千八百六十二年第八月九日横濱より
マニチン印
因テ過日佛國

公使ヨリ小笠原島ハ書皇國輿地圖ニ可見ナリ
ヲ以テ経緯度等精密ナル繪圖請求ノ来翰ニ答
フル文左ノ如シ

佛蘭西令権ニストル

トセシテアレクル

小笠原島経緯度等外ニ付被差越ト考國

并七月廿八日附之返翰意を欲さり小

笠原島一名無人島西洋而唱フコソヒスハ

アトシスニヨリ緯度廿六度三十二度より式十

七度二十五分英國船經一百四拾度及廿分
ニ十分之間ニあり同島之傍ニ在リ不持之
我ニ地圖上ニ示シテ其ノ音聲越されハ宜
赤水ト云ル此ノ著セ小地圖ナリハ非右
市中賣鬻ルニ同島ノ形不判好セハ此ノ形
舟汎水ノ形現ノ及不変を記セテ其國を奉
ル事ト不能シ又僅ニ小支島ノ傍ニ注用ニ此
ヨリ障不ハヨリ鳴あり又其ノ記載ニハ
此地市中賣ル地圖較多何れモ此島ナリハ
荒陬の地アルニ被知詳ニハニ異セ

予此の不少元より我に誤不の凡昭外國の志
へ示以極き者不あらぬを儘不遇を以て逐
て外國人より地圖を求乞らるハ此のなれ無
此程より其節之其の不愈し合不の地圖及び
沿海の浅深周圍之廣袤經緯の度程并洋委
是を梓不鐫め人との目論見あれハ生事なり
其上ハ子と差示をへし小笠原島等々般水野
筑後等初迎換之御委中々測定せしめしなれ
不日是を梓不鐫免中外一般不公示とんと
在り故其書一本を贈り至き間夫不てり解被

致交武謚之協同より禁秘は逐き不ありされ
其巨細明示おさし度年存此水とも百寮有司
又之宿多を特抜除遷之頻敷なり日不換り月
同小改中其身一概之辨明しお多し其法候之初
并警惣持場中委曲并過日宿古法の名より
其也し留已に不知識されし事とおも已り將
同深官不足之儀に付云々中越水ハ其方不お
以てハ公私之用便常不差支多かれ其節之
考ハ精々中付生徒教養忘らされ無漸次學業
奉熟之上て使用均在を均す不至々ハ此順

洞居申入夜相異語云

此文次ニ成^成年月替味亦出^出昭板中務大輔

水野和泉守

板倉周防守

此書亦書翰^取取^二載^七不^若未^達中^次二^載

不^ル應^接二^所以^歟又^ハ此^頃小^笠原^島務^ハ

南洋^島裁^ニテ^掌有^リ旧^記倉^ノ島^有之^トナ^レハ^今

同廿一日佛國公使左ノ書ヲ贈^リテ面晤^テ請^フ

是小笠原島事件ニ因^テ也^也是^日江^戸佛^蘭西

千八百六十二年第六月十四日江戸佛蘭西

使臣館^ニテ^同ニ^ニ於^テ外^國公^使館^ニ於^テ

是外國事務宰相送^送本^本送^送呈^呈又^又送^送書^書

是年議會台^台下^下河^河丸^丸の^の日^日合^合形^形過^過也^也之^之在^在知

同也^也該^該此^此日^日外^外國^國中^中務^務宰^宰相^相台^台下^下之^之形^形狀^狀報^報風^風此

佛蘭西令格^格ニ^ニス^スル^ル手^手記^記

トセ^セン^ンデ^デハ^ハレ^レクル^ル手^手記^記

同廿一日佛蘭西公使ニ面晤^ウ日^日時^時ヲ^ヲ定^定メ^メ回^回答^答

ス其^其文^文左^左ノ^ノ如^如シ^シ

佛蘭西令格^格ニ^ニス^スル^ル手^手記^記

上キセル^ルト^トニ^ニシ^シル

トゼンデヘレクル

貴國第八月十四日附之書翰為手セリ秋七月

廿七日八ツ時前廿三日第八月而余可致問國防

同子邸宅本訪可及之取相見譯言

文久二年戊七月廿二日 映坂中務大輔花押

水野和泉守花押

同廿七日周防守板倉勝靜郎江閩老列席佛國公

使卜面會之小笠原島来由詳ニ演述ス公使氷解

ニ他日同島規則ヲ投英セラレン事ヲ請フ閩老

美諾畢テ退引ス同日英國公使工閩老連署ノ書

翰ヲ以テ洋曆第七月廿五日皇曆六月十日同第七月二

十八日皇曆六月十三日兩度ノ來翰ニ答回ス

貌利太亞シヤルセダフヘル兼コシエ

ルセネテール

エキセルレン

イシントジョンニル

貴國第七月廿五日附十八号同月廿八日附二

十式号の事翰為手被中取致シ一休世

之称呼小笠原島の俗称子一三群島と也

小舎七称... 忠を復へ... 之交通... 卷十... しかと... 通之... 同廿六日... 忠徳常純... 全十... 時服... 外國奉行... 水野筑後守

全三

同廿六日今年三月小笠原島ヨリ歸府シタリシ

忠徳常純ニ賞典ヲ行ハル

外國奉行

全十五
時服四

水野筑後守

目付

全十
時服二

服部

若芙蓉間ニ於テ閣老列座周防家勝静演達参政

侍座次

同八月三日小笠原島ヨリ帰府ノ布衣以下及拜

謁以下之諸吏工贖典ヲ行ハル

小十人

贊善右衛門 傳軍艦組出役

銀貳拾枚

小十人 傳軍艦頭取

小野友五郎

外國奉仕支配調役

由比太九五郎門

以勅定

深山守平夫

外國奉仕支配調役並

田邊方一

以徒自付

佐藤志五郎

為此浦孫折殊ニ付被下

右於右筆部屋縁願閣先列坐勝静澹達參政侍坐

不徒目附ハ燒火ノ間ニ於テ演達先例ナリ

此席ニ出スハ持格ニヤ本書ノ俤ニ載ス

付
別冊下目記載ナリ

小野友五郎

小笠原島海峽外測量儀格外折換

右於同席再出勝靜演達參政出雲守堀之

敵侍坐入 金拾五兩

市目見持格

富士見番 一

以軍艦組

銀三拾枚 鈴木琢之助

寄合医師

軍部奉行 蕙教總領

同日 銀拾金拾枚 小野 荅菴

可會間同前同入 富士見番

以軍艦組

銀三拾枚 喰代和三部

小笠原島乃以用尾城首好共二付被下之

右於躑躅間參政出坐遠江守加納久徵演達入

外國中より配書物以用出役

富田達三

金拾五兩 同

金十兩

須藤清一郎

金十五兩

中濱万次郎

銀三十枚

宮本之道

小笠原島為以用昆紙骨抄紙三付設下之

右於檣間同断同人演達不

同日勝静同朋奥山金阿弥ヲ以下左ノ書二通ヲ

軍艦奉行江邊典不

以川右即光正門内誤作方ノ多附
以善法後格

宗伴善子
洋書潤死存因潤後

銀五十枚

柴 浦一

銀三十枚

塚本桓輔

銀二十枚

近藤然吉

銀十枚

松島盤夫

銀五枚

高橋榮司

銀三枚

豊田 港

銀三枚

板浦金次郎

銀七枚

以軍艦方下役

銀七枚

矢野澤次郎去

右之者其小笠原島へ乃以用尾折骨抄換ニ

付以褒美ト一ニ書面之通被下被送生取可

被申達孫

戊辰月拾日

小笠原島に於て用尾折骨を以て褒美と爲す

右に同所同人演達ス

銀七枚

以軍艦方下役

銀五枚

松原留吉

同所同所同人演達ス

右之者其小笠原島海岸に於て用尾折骨を以て褒美と爲す

骨抄換ニ付以褒美書面之通被下被送生取可

被申達孫

戊辰月拾日

小笠原島に於て用尾折骨を以て褒美と爲す

右に同所同人演達ス

同五日先月二十七日勝静力郎ニ於て佛蘭公使

面晤トシテ小笠原島ニ於て忠徳常純等力極メシ

所規則書ヲ後日送英七旨ヲ約ス因テ日本

外國奉行伊豫守菊池隆吉一名ノ書翰ヲ以テ規

則書之贈其書左ノ如シ其時港規則ノ贈

リシニヤ小花権典事カ筆記中ニ可載港規則ハ姑據之

佛蘭西令權之ストル

同五時抄錄之十日工キセルンシ

トゼンベレクルニ

以書局中入候以程我外國事務執政對話之砌

被申立候御申候事也小笠原島規則事寫批者

より可相違合被申候事也別函寄若此候

具譯之

文久二年戊八月五日

菊地伊豫守

一諸國之高船餘漢船等港内へ碇泊之者其

一國名船号船長之名船数乗組人数船泊来之

一船由子連日中役形申立却る只役人之善因

一諸國之船出入港之船役并輸出入之商稅

一不及差出候事

一港内碇泊之船中七條魚子妨あり候事

一不發炮候事

一港内出入之船ノ水先棗内之者一定之價銀

則言可拂事
一 港内碇碇之船、乗組之者上陸之上也狎し
一 田畑を荒し、其不仕法之者あるを召捕り船
の船長、引渡す處之過料可為差出事
一 乗組人、内浦島に在る時或は一時滞在は
以る子を預ふ所のあらば、其船長へ申立役人
之差因可從り、其船中を碇碇し、其船中
一 船東之船不便り立去遊在島之外國人も同
事断之り、其船中を碇碇し、其船中
右之條、文久二年戊辰正月於小笠原島水野筑

後守腹部為一定之もの也

今本年五月廿二日佛始名國工規則書ヲ達シ

同七日江川太郎左衛門手附手代共小笠原島
航海ニ村豊後守小栗忠順左又書ヲ進達ス然レ
共各八文ニ残り移民ヲ外國方へ交付ス
江川太郎左衛門手附手代共小笠原島
小笠原島へ父島民利後所用として外國を

行由目附支配配向并代官江川右郎左衛門
付手代共朝陽丸出帆一乗但八丈島一着幕仕
取安同島官寄二七可陸松繫場世之付後民
共申該中朝陽丸出帆下先中陽り致斗此首防物
邊二被泊幕在程合足計為又乘方仕幕積二有
同之然与安寄朝陽丸出帆前太郎左衛門手附
手代共依八丈島後民中該古酒取八、外不
申行由目附支配配向之者一引渡小笠原島一七
不及者被島松を以伊豆國附島一以梅向一尺
共七、廻島為段取取可取計与被作酒取二付

其後申渡意心為一七被取取處今被小笠原島之
儀右郎左衛門支配可二被作付取二付而七取
之取調多有之取二付右手附手代共依彼地一
若渡同島之模様一更為仕取者太郎左衛門中
立之筋中此取剛取可右取松二而一同小笠
原島一被善是帰^新七島と也廻島為仕取方と
申存取二付朝陽丸出帆八丈島再度之取右一
入托一取取委細太郎左衛門より手附手代共一
同申取取標為取計可申と存取依之此取中置取
以上

成八月
 同時太郎左衛門
 八丈島ニテ移民ヲ説諭
 スルノ概畧
 八丈島役人一同ノ家
 初中津灰口上大志
 此八丈島ヨリ凡百八十
 里程巴ノ方ニ南リ小
 笠原島ト申處此方未開
 未開ニ付人ノ始
 末計年被作也
 男拾五人女拾五人何
 者も夫婦者ニテ小笠
 原島ニ引移シ居者相
 撰可申立生撰ニテ引
 移ル候也

下之彼島ハ水濱後田畑
 切立キ植付小麥
 麦等外多分ニ古米石
 物儼立モ出来候迄モ上
 ヲリ米麦味噌醬油等
 外之食物モ勿論居小
 家ノ仕立モ込下置傷
 方之次第ニヨリ候而
 モハ舊美等モ被下置
 上島人ノ開祖ト申候
 此ノ世ヨリ無神代ノ
 人ト被教可申道理ニ
 付冥加之程程有候辨
 ハ人物宜取ル由モ申
 可中津人等此内ニ加
 ハ難シタトハ先モ
 此内ニ候モテ舊ノ
 趣候様之實ニモ申
 可也
 此ノ人物ヨリノ一
 人ハ、而夫婦ノ古
 米等

採之望もあらハおもいの通添セ巻一可申若
 男女環連と引後りなむのきめ河也を可申
 采女子を撰む通一女子を連と引後り成りの
 是又めあ己さ可申男子をもらひ交可召連
 大工九官渡治政与赤心ゆ疾此の十人出稼
 とし是は召連可申物取撰可申立尤
 一日の以手南河程取載記言采承乳一可申立
 疾其妻是松野留以何物も其妻也此は其妻
 右等之以物之是は召連公候より蒸氣松以
 差后二其采折二付島役人共一同厚く差を情

已以物之通り撰方以一一可申何れもは蒸氣
 松二白以召連出納之其の舟追而外之以松を
 以て以差後二可申采疾小笠原島二其江戸表
 行敷り役二被巻詰中其在活有之疾間安耽以負
 同引後疾様撰取加足疾此のへ可申同疾

戌七月

別紙

白河内木綿	老反
松坂信男物	老反
同新女物	老反ツ、

小倉 帯
金 五兩

移民男女子供迄老人別々事面之面被下之

同十五日太郎先衛門属吏ヨリ外国方之移民ヲ

引渡久

伊豆國附ハ丈島之内

大賀 百姓

農間 漢車 孫 出 來

女房 成三十三才

百姓 三十五才

女房 四十六才

百姓 以 四十三才

女房 藤助 三十二才

後日勿謂左事似五人の子供を引渡ハ丈
島ニ残置代リといふ女民是也

前同断

三根村 百姓

前同断

五太郎 三十五才

注日加洞この後兩人の子供を引誘す同助 女房
代りおもと云女尺達来八

末吉村 百姓

了 四十五才

英 五十四才

きそとく 四十六才

四郎 十四才

小 十六才

松 四拾一才

乙 三十五才

常松 十三才

女子 九才

峰

女房

常松へめあてせ

百姓

女房

峰

四郎め阿てせ

中の 百姓

女房

百姓

女房

百姓

女房

榎五村 百姓

女房

農間大工屋事縁出来

榎五村 百姓

丸 三十一才

信吉 三十一才

以 十三才

次郎 二十一才

望 四十才

右郎市 四十七才

市人 二十五才

三 三十七才

農間候子孫發信也東
今松浜九才之男子八丈八錢置山坂中五八

勇松八兄あハセ

俵

信

八松

石

金

乃八

女房

如

三十五

焔

勇

十五松

侍松ハ娘

七

五由

右之外出縁之者

右野村

百姓

忠

三十五

忠

忠

三十八

大工

同

加卜方目録由哥助次

庄

五十一

木挽稲屋孫又吉助

忠

三十五

三根村

百姓

忠

四十三

大工

同日十五日

新

三十六

八丈島持
小島之内

宇津右村年寄
由並弟

小

五十五

島村
百姓

民

五郎

二十八

ノ人数三十八人

右ノ八丈島出百姓人数之内より今般小笠
尔島へ通引後可相本福民并七縁之者其書面
之通引活中候以上

江川右印左心子附

戊辰月十五日

川崎 俊平 印

江川右印左心子附

上井村 姜平 印

朱敷外國方

板田晋捕房

暹羅参着有目付方

又酒膳舟由中藏原物又去後

同廿六日

同廿七日

大関

三根村

末吉村

中ノ

権多村

右ノ者其 貞実ニ而差働及之候地役人凡内

調中父孫

一出総八人之者一日為人根三女七分五厘ツ
、食料之外は手筋被下孫に付於八丈島急
五支口、振借お本孫振振田晋捕、中同
、尤外仕事以多し孫古七右孫亦其不支取
百姓七勿論船方をも乞得孫在孫振申七八

同廿六日朝陽艦再七小笠原島へ着港外國奉行
支配調役田中麿太郎定役林田晋輔同心金坂貴
之助徒目付富永一造小人目付原又吉医師阿部

將翁衆組渡島八丈島へ立寄移民男十五人女十
五人大小五大人木挽一火鍛冶職一人ヲ連來

同廿七日去月十七日小笠原島開拓事件ヲ奉國
政府ハ報知、書翰送達費用亦八トソ申立
書意評議、遂々本日外國奉行連署、書ヲ以テ
閣老へ呈ス

重國書記信紙より送差出書翰之義ニ付
中上野書付と云ふ

外國奉行立合役

此般小笠原島中用招滿之義ニ付字漏生政府

紙之通亞國書記官より申出候一休字漏生政
府印紙之通書記官より申出候一休字漏生政
閣儀七字漏生國條約取結之旨亞國前但公使ハ
書立り不格不用候仕候候り字漏生不關係仕候
如事件此部より亞國ハ此耗出候筋ニ付是上之
同安七書翰候才出費等之儀三付候是申出候
同由之候得申右等七本國軍艦之便等ニ而高
更便三申出候候之候ニ可取之儀否為候申出
候候上之既三右様申出候上之候方より以續

在筆候才外未而量り取之旨取申出候
出方候其小笠原島河開拓費用急^洋銀之内
仕任辨別紙之通伊豫守より五兩差出候候可
仕申出候仕之申出候文臣翰来共申出候候
伺候以上

村垣洛語守
津田近江守
竹本隼人守
一色山城守
田代對馬守

別券 國書記官 伊豫守

直米利加合衆國使臣館書記官

上クワイル

アルセボル

英國券八月十二日附を以て前任外國地多水
陛下信守の善送られし書翰後手先日我外國
事務執政の了亭漏生政府への書翰所手許
周旋被改の旨要曲款厚意の取扱辱へ訪は
る爰に候右状候と奉てメキレコトルラル

四枚四十セント申す許より挿被置し由
而飛御世注人止ル午シ之受取書を添申出ら
れし即生類之如く返宛および候右後手被取
扱下信守轉取に付は取報答書よび候譯云
之久二年戌八月晦日 幕代伊豫守

東收ノ通指令濟ニ因テ同晦日コノ書翰ヲ達ス

本文ホルトメシハ所托ノ字國政府へノ書翰案
書留ナキハ前ニ云如シ按スルニ前ニ載セシ忠
徳常純カ稟議ノ書ニ添シ其證トスヘキモノ書翰同
文ナルハシト考フレバ其證トスヘキモノ書翰同
ルハ今可否ヲ定
ル事ヲ得ス

同前八日申す事

同閩八月田中廉太郎小笠原島へ渡航左ノ件々

ヲ示談ス

一福氏共居小家取建海之上談品因寒湿気取

防務採取建方之事

一若也暴風津波等及之居場所取換取立退

案々可相本望軍之尊居所件以少計場所而

一取建之事

一井戸堀堀之事

右左出稼人共居在採内夫々相整務採枝方

存採事

一遠方之地取取返等々暫差置心袋採一件

一伐開生後南袋採取返一採味の島之法呂粒

一付食料之余名兵外國人ニ賣取採取計方

一取之取

一阿却將翁相取得採採物採之内果物生熟之

一取上外國人ハ以採ニ取生採採取取取

一芭蕉布等外相想之織物也採採採採採採

一採氏共懶惰不取採等不生採進取之年

一食塩製方出末採採採採採採

一正覚坊之甲法少一採採採採採採

一油之可候品穿鑿之可
 一魚油紋方之可
 一女子其閑居之時之振古之業工風之
 一事
 一但芭蕉布之可織糸製之方昔之候も子供
 一西之仕事も可相成り存候可
 一植付灰薩摩芋昔より焼酎を以灰採成り候
 一事
 先是八月中阿部將翁江府出陣ノ節菓鴨植木屋
 長太郎同外之吉ヨリ買上携下処ノ藥草果木竹

等ヲ植ニ其品目「本密柑九本雲州密柑九本九年
 母九本養老梅九本アング九本夏秋桃九本前百目柿
 九本紅白スモ九本梨子九本大實林檎九本大実
 柘榴九本葡萄九本金柑三本真竹江南竹九本胡
 摩竹一株亀甲竹一本使君子三本蒲桃三本橄欖
 二本東京肉桂七本肉桂七本○東京肉桂二本龍眼肉二本
 灌種縮紗二株黄耆二株木香二株甘草二株灌種
 杜冲二本土伏苓二株生省藤二株吳茱萸二本延
 胡索二株銀合歡二本金合歡二本巴豆一本肉豆
 冠一本ナリ尚「松苗千本杉苗千本椴木二百本檜

木五百本ツガ苗二百本ハ後便ニ送り渡ル可ク
托出帆スト云リ木金合燦一本四且一本四且
閏八月四日在任セシムス不病ニ依テ小笠原島ヲ
去リ他國ニ轉任セン為メ其所有ノ諸品政府ハ
買上ヲ願フノ書ヲ出不^レ書ヲ出ス^ルニ本林
林辭子八百六十二年第九月廿七日
日本政府役人ハ^レ本大寶林辭子本大寶
一拙者セシムスモイトリ一蒙十九ヶ年經在
島在任候ニ處以経病策取生候ニ付氣候

本變リ候場所ハ轉任以多^ク方然^ルト拙者
是所居之者其立退候多^ク便船及之次牙拙
者所持之品ニリ本政府ハ蒙拂中後存候也
右便也式千ドルラハニ及之候
下^ニ自然拙者死去以多^ク一孫ハ、妻ケツテ井
同候係同様計可申事モ中蒙萬^ク助^ル也
セシムスモイトリ
同洲田中廣太郎母島ハ渡航シ島民今工ナシ
マ^レ對談ノ上^ニ所差出^ル證書便船次第父島

ハ報シ来テハ人数ヲ分ツテ母島ハ渡航スルシ
ト豫メ其準備ヲナス然レモ父島戻切ノ後ト姑
此事ヲ止ム

同月小笠原島鯨漁トシテ中濱萬次郎ハ渡航ヲ
下令以其違文左ノ如シ

中濱

江川右近衛門内膳方子爵
内普濟後格

中濱萬次郎

右若小笠原島ハ若海形ハ舊ハ船步廻ニ付右

ハ船ハ為集組差モ鯨漁ノ務ニ切取采取之
最モ通辨モ也為右ハ且右モ船運好并歸漁
之仕方等比度ハ文嶋ヨリ之移民トモハ右
教務積リ拓念用方中殿ハ伺右隔辰間ニ付可
申渡原ハ左ノ如ク島津ノ家ハ此ノ新設ノ地ニ
右之通被作渡津畏辰委細右初左門ハ可中
開決以上ハ新設ノ地ニ付新設ノ地ニ付
嘉文八月十四日ハ新設ノ地ニ付
右芦名重以初ヨリ右後モ新設ノ地ニ付
就右勘定所ハ左ノ書ヲ出ス

子附申廣万次郎
被俸所承歸漁

私倭今般小笠原島へ被差卷君像形古書以私
一乗担鯨漁才籍二所扱系咄之責七通弁七也
未公相且右以松運持并鯨漁之仕法等以方八
丈崎より之福氏七也八未差取積り波作活取
然り安之本國地廻船之義出帆迄凡標小互換
得と乗度舟句論港へ入時凡待之工暇凡次
才乗出取而凡標二寄筆左も乗度一延込波
疾義二有之西洋形以松東方之倭七右二遠心
碇泊之港出帆より着松可仕港才下航海中九

とへ凡標不宜所共地形之港へ逃入取標之義
有之形而七西洋形以船之論り世之依而出帆
亦一般之善悪等具宜候倭第一は此座取然り
寛七八十年前二所製造二古本取右君像形船
六為以船之義七高年二五二水工切之以修復
古本取取二二松底等要く之新案在儘差置
取由承申取右取持取取船へ乗入取依何分懸
念仕直七小形取二決得七古取七鯨換古本直取
義二取取取取小笠原嶋へ渡海同為挽内取取
以取後取共取鯨漁仕法迄持等教授波取而也

中上以上
本珠三七八十年を以て前水上下出扶安の
以修復軒要の船底等を修設置扶由右件
危時出船且之小形舟大洋中遊業也
大業七本並中扶然之安幸心紙後國平野廣
為与坤者為國家餘漢開業社友存念之
十年以來出付所之此年中二拾五年之松を
求め昔械也出来扶安餘漢の家地教授被扶
者世之故の如海小生育之餘漢句他無恙
矣人廿一被奪所送憾共款之安并之扶見

扶依而右松以雇上以座以の松五而被作扶
有書之餘漢以用被作被扶入之棄組之者
餘料并食料の已以下之被下置和賃等八松
より以下之不取願餘漢開業之時其自分積之
同物運送以善評本在持之為果加用扶
方乞松換而出來之書之入用を以て夫、扶
修復被作付歩様仕方有蓋蓋中開扶依之扶
中上以上

中濱萬次郎

右之通手附中濱万次郎より申立扶三付扶

申上原如何可申返米奉山下知事同原以上

文久二年戊寅八月

江川右部九衛門

同九月九日在島廳吏議之ヲ移民ノ方法ヲ定ム
一百姓共拾危人之内有為郎太郎一五人義子
辦理者辨法用弁ニ宜留物ニ付年寄役中付外
百姓共一同之取締トモ為公得一ヶ月迄人
ハ急走歩口、為法手高被下法事

一出給之内木挽破忠太夫依一人破之安仕
每ニ乙出給骨朽古勅書ニ付^日去米以、之外
勢如以手高ト、乙先一ヶ月程之見込ニ
系音高被下法事

一出給一同米麦取交食用為改換積ニ系安
破人之義ハ丈島お力トモ米飯而已食用被
ト麦飯雜混之物取出新得共一鉢米麦取交
被下給積^日而持越ニ在米且食料多分
世之^日作付説話之上取交相法所委右手妻
飯を焚取ニ在手教ト在掛最前取極原長

飯糰一人古膳狀糰之宴一同古傷扶間而矢
弓之古膳用炊京尾海海最七米古用扶
樣仕夜九扶得七想人數之内八米老并増枝
下扶得七宜散与欲立扶子付増是扶子
渡方九之通
同日糰一曰米五合麦五合只
一古糰一口米七合麦七合
木梳
七人
大工鍛次廿七人
七人
十日但米麦其糰上ヶ扶上其液
一百姓其食料之義麦之方多分三食用為被扶

同日糰一曰米五合麦五合只
一古糰一口米七合麦七合
木梳
七人
大工鍛次廿七人
七人
十日但米麦其糰上ヶ扶上其液
一百姓其食料之義麦之方多分三食用為被扶
糰會用古古試在上危之通被下扶子
一最前指狀古米扶麦復中虫喰二古米漸濡子
糰之入以多一糰好其腐敗二古よ心食用
糰之米並其分焼耐二古米好旨百姓七中
糰出好試不為持外國人八也飲七扶安買交
糰出好の也有之費二也不古米義三付
古右乃拍糰括括事

右之通評儀稿

十二月三日百姓銘之家三叔米三付一
 日老人米五合妻五合口八女老人米三合
 五夕妻同断子世老人米就合妻就合口八
 口方以多十孫子人取小忽口同八月申田中
 一廣太郎母島一叔取取同島マ口申引合
 義出米換書役船有之次口父島申米口採
 引合引合引合引合引合引合引合引合引合
 同月小笠原島就鯨漁再口中濱方次郎ヨリ建言

此雇鯨漁船并鯨漁等之義二付
 申上長事付

越後平野廣尾所持鯨漁船此雇上等之義申上
 一孫水夫孫系并船申請入用被下置船此雇工
 口中換不出來之船七請修復被下置船上鯨漁
 用此之費七自今為物運送任孫口口口口無之
 孫此口口加船賃其下渡等欲問其口中口
 孫口付此口口口口口口口口口口口口口口
 請入用不務作得三孫口口口口口口口口口口
 上孫

一 油價位二 去年中候
 一 都合宜大漢有之 去年平均二 仕居而一 今年拾年
 此得括七平候二 味生候
 一 廣業中上候 粟但給銀之義 是近南人共より
 水夫の義 是候 高りを以て申上候 義は可有
 之 左候 候七 夫より引下上候 俵二 七 去年中
 一 間 爰我 允 徒二 七 錦 漢 得 度 油 骨 木 賣 拂 代 系
 を以て分一手二 而 得 下 候 而 一 互 為 系 与 身 存
 候 得 共 錦 漢 盛二 度 米 候 中 一 七 最 為 之 時 候

一 料 漢 漢 故 本 不 中 候 米 与 身 存 支 可 申 候 南 時
 一 出 國 知 為 七 錦 漢 以 之 奉 之 候 得 之 候 申 多 少
 一 有 世 也 不 相 分 心 前 水 夫 給 料 亦 申 候 得 之
 一 兼 但 候 申 の 申 有 之 旨 故 候 与 身 存 候 申 之 意
 一 錦 漢 之 時 高 七 春 より 終 申 七 二 申 注 候 得 之
 一 同 月 冬 末 迄 南 梅 故 兼 出 候 俵 仕 春 二 向 上 候 均 七
 一 此 日 申 近 海 候 申 俵 表 地 申 申 候 申 紙 申 候
 一 申 漢 万 次 郎
 一 右 之 通 手 附 申 候 旨 次 郎 申 申 申 立 候 二 付 此 旨
 一 申 上 候 旨 上 申

十成九月工部
江川右郎左衛門

武部公水夫修料外松中詰入用

一^{十月後}金九百拾九兩余

一^{十月後}金九百拾九兩余

一^{十月後}金九百拾九兩余

一^{十月後}金九百拾九兩余

其方儀手附清普法役格申漢万次郎義小笠原

島中録漁中^外為^用若^將形^出為^出船^上為^乘

但^善是^法候^候申^置居^處此^度被^後不^村松^漢

平野直並所持船中雇上合船三^日録漁乃^取候

同候伺長隔候旨支夜次舟出帆可致旨万次郎人

同可中後候

同可中後候

同可中後候

同可中後候

同可中後候

同可中後候

同可中後候

同可中後候

同可中後候

同可中後候

德北袋持最子軍艦出來植付出來灰場所

同十日子百有九十坪比烟六反三畝ヨ

一同新次川添之各十一人、割取

二天音式子式百方拾四坪比烟七反五畝

同且同新隣地十十一人ハ割取ハハ音五人各

式子四百坪比烟八反

一扇浦西海山物軍艦植付出來在名

島方千四百九拾三坪比烟四反九畝余

但方八千四拾七坪

新田

同廿六日魯西亞人指揮役シヨンステンロトス

同國蒸氣運送船ノ水夫ヨ井ルリハスル以同船

ヲ脱走ス因テ小笠原島中捜索捕縛ノ依頼且同

船中重病ノ者二名快復マテノ間上陸加療ヲ許

可等兩條ノ依頼ス其書知左

ホルル口ヨド小於七千六百六十二年、十二月十

七日

一松者指揮役多ク魯西亞アモトルコム名地

附居之蒸氣運送船ヤントヨトヨト

水夫之内港人ヨ井ルリハスルツツ与申者

一其許茅造号之書物為手以多一決出矣人之
依成可來丈探索可致味八百廿二年正月十日
病入之儀此當島在柱成也の神申より引語
族もの及之儀ハ、住居之義ニ是許可申決
同廿九日在島廳吏檢地、上ヨリシク居宅ヨ
り奥村ノ方隣濱ノ地ヲ貸與ニ開拓サセシム其
證書

於漁人島子八百廿二年正月二十日

一私義不毛ノ地ニ有之候地面是ノ所
以中政府より相借仕候依相違世仕候右
以入用之有之可仕候
同十一月十九日先是中濱万次郎鯨漁中心得
伺書ヲ出不本日指揮、令有リ

私子附中濱萬次郎由雇上鯨漁船ハ
兼但小笠原島ハ被差候ニ付心得方
其外之義ニ付申上候書付

今般柳及國村松濱平野廣益亦持松濱雇上
右ニ百餘漁為被差候紅兼但小笠原島ハ被差

一 野原 是所 持 松 作 雇 工 少 松 葉 紐 被 作 付 録
 一 深 上 丁 小 笠 原 島 一 被 若 是 疾 股 捕 頃 以 膏
 一 所 入 以 遠 方 弄 作 一 滿 一 江 河 觸 流 口 柴 下 疾
 一 掃 仕 方 幸 存 疾
 一 出 帆 後 自 吃 逢 難 風 波 一 松 所 軟 若 出 來 疾 費
 一 其 最 家 却 令 宜 若 疾 一 入 津 船 掛 之 上 修 復
 一 若 如 一 疾 掃 仕 方 依 而 寸 相 商 入 用 糸 法 匠 相
 一 本 疾 掃 仕 方 幸 存 疾
 一 但 亦 杖 之 外 買 上 物 等 多 分 一 若 疾 所 治 之

一 用 意 一 而 不 是 以 多 一 修 復 出 來 直 若 節 之
 一 其 即 料 之 以 代 官 松 欵 之 欵 之 一 總 合 立 合 之
 一 上 入 用 後 其 外 取 調 令 其 場 所 一 中 上 河
 一 若 國 改 修 復 若 加 疾 掃 仕 方 幸 存 疾
 一 之 疾 亦 亦 亦 丁 急 組 之 內 病 死 者 有 之 若 疾 之
 一 最 寄 若 松 葉 寄 若 疾 寺 院 一 埋 葬 被 一 地 方 遠
 一 之 大 洋 中 亦 亦 亦 丁 死 亡 之 若 疾 之 疾 疾 之 地 宜 次
 一 亦 亦 亦 計 若 掃 河 仕 若 若 疾 之 若 疾 之 若 疾 之 若 疾 之
 一 地 方 近 亦 亦 亦 捕 漢 政 亦 亦 亦 若 疾 之 若 疾 之 若 疾 之 若 疾 之
 一 津 録 肉 之 入 札 之 上 賣 抄 由 骨 等 之 亦 亦 亦 持 肉

一 庶民之醫師老人為乘組方其存疾

中横万次郎

右之通手附中横万次郎申立其二付此書中上

其以上

一 成十一月

書面九ヶ條之内達之義此令通知醫師為乘組

決義難及少括其條同之通左及八人疾

成十一月十九日

10

一 明日斗村之義其用意在区内之買上之積り

同三年清同治二年洋千正月七日移民及七出稼

職人等ノ休暇ヲ改正

一 百姓其義昨逢中七家作其外忌、加極也

之決付夫中村開墾方仕事其為改者折決

故一節月表内六日休息如中活置決得共

最了持地才也銘、相活為付氣候之緩急

耕作之都合也可及之決、付休息と義定

其義也相也疾事

同月廿一相法研十月十日小笠原嶋ニ於テ在島
 人ウ井ル工ムギルリ暗殺セラルルノ旨ヲ訴
 フニ依リ直ニ其殺人心當リ探索ヲ命スルト云々
 氏因猶シテ答ヲ爲サス數催促ニ及ヒ結局本日
 於半野船一同呼出シ相糺ス所左ノ書ヲ差出ス
 右於島第一十一月廿六日
 其ウ井ル船乗ル日ヲ義廿六日夜何者ニ所
 同業セ兼テ相分刺傷致ス事廿七日歿死去仕
 島長藤村共命日埋葬仕候義相遠望由仕候若
 一三付紅花逐一鳴味仕候要シヨ事候ニ子ト

一マスススス西人之内ニ可有之存候事
 同三月十九日亞國ノ鯨漢船乗組ノ水夫脱走ル
 ニ及ンテ船長ヨリ其者捕縛及ヒ罰罪請求ノ書
 ヲ小笠原島役廳へ差出ス

同月於ポルトロイト千八百六十三年五月六日

ホルトロイト小何子

日本令權炎下

君

一シエツ子デウ井ス、ジヨトジエムステイ

ブルス并アルヘルトルアイムスと申三人

の水夫私指揮以多し候エビギル名船より出

奔以多し候ニ付右之者共海員捕ニケ月之

間名船一ノ業以申付以符被下夜相致候右也

私南港再被之候外水夫共之戒ニモ未申

候情致勢ニ有之候間右態致仕候

貴下之恭謹従者

臣米利加合衆國之商

ニウベトウラルト名地仕出之

エビギル名船長

エベンチエフナイ

同月中前ニ亞國鯨漁船ヨリ訴出シ三人

等白首ス仍テ一通リ詢問ヲ加フルニ其根原ハ

士官苛酷ニ出ルヲ以テ法ヲ欺ルハ其船法ニ

對シ不輕事トイハトモ皇國ニ罪アル者ハナリ
子ハ以後ヲ説諭ニ船長カ所請ノ罰罪ヲ免シ島
中滞在ヲ許シ兼テ所定ノ規則ヲ讀渡シ請書ヲ
為サシム

一 ホルトロイトル於テ千八百六十三年第五月
一 私共儀エヒキル船付属之水夫ニ有之候要
士官之ものとも取扱ふ宜同船より出奔被
し日本令權へ巨細自訴被り候義お遠望候
座候然る安船長ナリより法ニなす三ヶ月
の間日本人之為ニ嚴重之業為被候戒此下

貴中候様以事面中務置候得共候仁息を以候先
産等ニお米難有申存候然り上ニ南島張為中西
各洋人ニ關係セし南港規則お可申候
申立候様ニ事請申出候ニ及エドモンドエムテウ井ス
貴中候様ニ事請申出候ニ及ジエツチステールス
同申候様ニ事請申出候ニ及アルベルトルアイムス
地無候様ニ事請申出候ニ及候様ニ事請申出候
同五月朔日同島退帆林和一郎松浪権之丞阿部
将翁等乗組歸府ス

同島退帆林和一郎松浪権之丞阿部将翁等乗組歸府ス

同九日朝陽艦三度小笠原島へ着港ス先是去年
八月廿一日三郎島津久光後任大隅守勅使護送
驛路東海道筋武州生麦村其從士等英人
ノ無礼ヲ怒リ斬殺ス是ガ為應接數回遂ニ英國
ヨリ數艘ノ軍艦ヲ差渡シ公使驟リニ償金ノ論
ヲ主張シ事機ニ依リ兵端ヲモ開クハキハ景況
ニ至リ既ニ事情迫切ニ及ヒシカハ長崎箱館ホ
ヘモ令ヲ下シ專ラ兵備ヲ嚴ニシ海防ノ準備ヲ
為サシム此時ニ當リ各國雜居ノ離島ハ僅ク人
員ニテ官吏ヲ置且移民ヲ其儘ニ居ラシムルハ

釜中ニ奠ヲ放ツニ似タリ加之隔遠ノ孤島開拓
モ容易ナラストノ議論サハ起ルリ是ハ小笠原
島雨ニ開拓ノ議ニ安藤信行ノ主張セシ所ニ
專ラ其事ヲ裁判ス然ルニ去年四月信行カ職ヲ
罷尚十二月ニ至リ前掃部頭井伊直弼カ領知
内十萬石ヲ減シ紀伊守内藤信親カ所領村替旧
地ニ復シ下總守間部詮勝カ所領一萬石ヲ減シ
隱居謹慎若狹守酒井忠義相模守堀田正篤及
信行等共ニ蝨居正篤ハ所領一萬石信行ハ二萬
石ヲ減スルノ嚴令アリ如此柳營ノ處分掌ヲ反

又如人権勢アル時ハ人僉之業諂媚心言半
句ヲ誹難スルモナク権勢ナキ時ハ認善事氏
悪シク難論スルハ洗季人情百事彼徒也指揮
セシ事ハ論議アル半ハ原島ハ開拓ハ
無益有損也下評判喋次傍先時モ早引誤呼呼
ト令レ直ニ艦シテ品川海頭出帆航海本頭各島
ノ港ニ入帰府ノ令ヲ傳フ忽萍帰府ノ准備ヲナ
シ移民等ヲモ引纏先扇浦ノ廳舎及其他在藩番諸
吏ノ邸宅ヲモ在住ノ島民ハ分共ノ部屋四房ニ
棟長六間梁間二間半ヲセルホシ元後所三間

ニ二間半一棟物置一棟並ニ船六艘共ニウハ
ブハ應接所三間ニ二間半一棟ヲエホトニ齋藤
源藏住宅二間半二間一棟コルリハスハ山添大
物置七間ニ三間一棟海岸在来物置一棟共ニレ
ツワハ平野家三間四方一棟ヲラホトハ醫師
宅二間半ニ一間一棟奥村ナルシヤトクハ兼太
郎居住二間四方スニスハ同人火焚所ヨリシ
ハ板屋百姓家三間半ニ二間ヲラホトハ男ハ
外出稼小屋鍛冶方小屋物置臺所等五棟境浦ハ
ルセヨトセフ奥村ノセヨトテヒジヨ、ヤハトシ

ヨシカチカ人子ヤレ等へ莫へ其他大形押送船
ニ船舩其帆モ父島セリボレウエズブラホリ以
上三名へ莫へ小形ノ漢船舩及船具ヲ添但帆ヲ
具セズ是ハ母島マツルへ前三名知リ傳へ莫フ
ベキ旨ヲ托シ最前平野船ヨリ買上置シ古ホリ
ト船一艘ヲモ同三名へ莫フ且米麥合テ二百俵
程大豆五十苞小豆十苞水油入樽其庖厨諸器
具等ハ天々分配スヘシト達シ分配方男一人
ノ分配高ノ半減ヲ女子小童^男ニ至ルマテ人員
悉皆ニ分與勿論也ト説諭シ尚昨年八月中セ

トラスマツレヨリ所取置ノ證書ハ横文ハセ
ホレハ托シ序ニ返シ與フベキ旨ヲモ談シ植付
草木培養等ハ懇ニ遺托ス此時廳舎ノ蹟ヲル
イヌレツワリニ托シ左ノ保状ヲ出サシム
於ニ見港子八百六十二年茅六月廿七日
一私義利益之免免羽浦小おひと地面一ヶ處
相借仕共義相遺世体存候以後日本政府
ヨリ由美園取之候迄賣掛申問者候
於ニ見港子八百六十二年茅六月廿七日

一日本令権より紅丸へ建家食料其外當島江
 以殊ニお坐候諸品被下置遣ニ次載仕候破
 船以多目又々及難流候日本又々其本國へ
 便私有之候上万事扶助可仕候且石碑被
 所墓處等々可奉文へ附大切ニ守護可仕候
 此書島民連署ナルベシト小花カ筆記中署ヲ
 脱ス然ルニ前ニ載スル所ノ書中私共へ建家食
 料其外當島ニ御殘ニ相成候諸品被下置遣ニ頂
 載仕候云々ト見へタレハ一名ノ書ナラヌハ論
 ヲ族ストイハトモ其名ヲ知ルニ准據ナラケ
 レハ姑ク原本ニ隨テ交名ヲ知ルニ載セヌハ
 邊ノ退去頗ル煩雜ヲ極ムトイハトモ兼テ島中
 處置ノ事件未タ裁判ヲ為サザルモアルヲ多忙

ニ紛レ打捨出發スベキナラネバ夫々處分ヲ決
 メ裁判ス其中ニ元アルミルリンチヤムズへ附
 属スル處ノ地所トトマスエツチウへブへ讓與
 へシ旨ヲ訴へ出タリシヲ未タ許可ノ證書ヲ連
 與サザリシカバ此時左ノ證書ヲ授ク
 五合於ニ見港千八百六十三年第六月廿七日
 元アルミルリンチヤムズに屬し候地所トトマ
 スエツチウへフに讓受け持地ニ相違世之候
 地之批名記名被候
 二見港ニ於テ

二見港ニ於テ

同社可憐下中

セームスマツレシ

總テ移民共ノ開拓スル地既ニ八千坪ニ及ヘリ
是ハ僉在島外國人ニ委テ事全ク整ヒ小花作之
助益田鷹之助原又吉堀一郎及ヒ八丈島ヨリハ
移民男女トテ引拂ノ準備遽ノ事ニテ百事忽卒
也トハハトモ漸調度取揃ハ同十三日茅士二
時小笠原島出帆同十九日朝八時浦賀着港翌日
日歸府ス

同七月伊豫守菊地隆吉稟状ヲ捧公テ小花益田
松浪ノ三士及ヒ雇醫師阿部將翁等ハ賞典以請

ト善事半島赴國ハ時不為人謝ハ其美事今

小笠原島時同松浪等トテ在島
仕候去任雇美事致書付山

兼其狀請以呈請長官ニ奉命兼池伊豫守

同社可憐下中

同社可憐下中

同社可憐下中

同社可憐下中

同社可憐下中

松浪權之丞

右之者義去几酉年十二月水野下總守服部長
門守伊豆國附島之備向取調且小笠原嶋以
開拓法用被仰付其狀其節下述航海中既以
一狀場所故特親後港之同様之珠之空帆浪
荒之折插孔生難斗程之委無意小笠原嶋以着
以多一州兩侯阻等不相厭侯山荆路跋涉野宿
等仕在島外國人也不立入場之這も罷成全島
見分取調物等抄取候一付書面之者共取開拓
同筋取扱と下之善残置去春中下總守外支配向

之者一同内村仕候安右后居連向一狀支配向
之者一前書之查之亞米利加國長尾林候用之方
より幸甚違二相増出候を以以褒美之義下總
守長門守より申上昨年申上之由褒美被下置
候義二有之然に委事面之者其七前書功勞
之狀上程候海孤島に居候以開拓向取計
國威不失様在島外國人共之由委置以多一且
去候八月中一丈由より差後候被民示出候人
と也差配仕居小屋取建方を以免麦畑切開
葱之外培養方特規物試造之小松打建等也

石之考義去夏支調^此調役田中廣太郎八丈島
而後民心極人相撰小笠原島、連泊所、古造
花城、安生、次麻、疹、并暴瀉、病、流、行、之、折、物、別、匠
昔折医療被、一旦八丈島、一、十月、迄、留、申、之、東
号、医师、之、土地、一、村、年、末、炊、居、以、治、病、療、治、款、出
治、也、の、夫、一、施、業、被、一、遣、一、及、小、笠、原、島、相
泊、在、初、役、年、後、民、心、極、人、等、少、快、之、言、一、勿、論、在
島、外、國、人、病、業、子、て、も、兼、用、手、當、社、生、上、画、而、本
学、夢、本、業、之、も、の、一、村、南、島、一、多、之、樹、木、持、渡、株
分、培、養、之、南、仕、新、規、織、物、試、造、之、義、も、同、人、相、心

得、之、活、以、多、上、追、一、以、益、一、可、相、本、基、本、心、按、一
ヶ、年、之、間、不、自、由、報、苦、少、相、厭、精、勤、仕、候、一、付、水
野、下、徳、守、一、同、被、遣、候、寄、合、以、医、師、慈、故、物、款、小
野、苓、庵、一、り、為、以、褒、美、系、我、牧、時、服、二、一、被、下、候
間、將、翁、儀、勇、分、と、遠、右、以、見、合、一、七、相、本、直、候、得
とも、子、実、一、於、一、初、^切報、苦、七、苓、庵、一、り、り、右、増
治、候、義、一、付、右、相、由、之、以、褒、美、被、下、置、候、様、仕、度
生、存、候、依、之、以、為、時、款、候、以、上

亥、六、月

同十一月下野守竹内保德伊豫守菊地隆吉連署

シテ小笠原島開拓費用ノ殘金未算當決セズト

ハ先金藏入返納セシメテ請フ

小笠原島の開拓費用ニ付法取用
之金并洋銀九上納之額申上決事存

竹田下野守
菊地伊豫守

法取用金并洋銀五引替分金有金
壹万弍千三百五兩二分永百八拾三文

一 金六千三百拾陸兩永弍百九文

外金五千九百九拾四兩弍分永百五十四文

法取用分金三老分銀と引替分金
壹万銀七万八千三拾五枚半

一 洋銀七万三千五十一枚三十四セント

外洋銀四千九百八十五枚十六セント

法取用用金并
役ノ相替之分金

右在小笠原島開拓費用ニ付先般水野下佐

右服部長門守孫藏長門守金之十一法取用

内本麦等外諸品以買工代並去成八月申八丈

島より後民並此島大工木挽務等も後法之

節法以手南新用之其具農具代組家等外法

品以買工代且昨年來於小笠原島在島之役

ニ而取扱取外國人ニ被下品以買上代雇賃銀

等ニ是排法洋銀と右寫之廣巨細内洋銀

取調中上取續りニ而最子取調方も出来家取

要此程之先也。右書款不殊極矣。仕候ニ付
猶取調方寸追々可仕候得共一時急速
分相分益採撮取申上。又彼島に被遣候役取
之内洋銀若持候不申下ルル通用之土批路
ニ納方ニ差支候ニ付一時採習相借為仕候分
也。乃之右在帰存没軍ノ返納方取纏め取策ニ
去取得共物價内國内与遠心不辨之工務別言
價之島ニ而難候仕候工務ノ少給之者上も
石込納方延引ニ取朱然ニ変右之外取路下形
取水金洋銀ト書備之通有之用達三井八郎

右所門方ハ次登出得共此程同人宅懐失仕
り手爲之場而ハ差支候也。此取物然急之者中
出立之次才ニ日居同遣拂候巨納内評懐義
七取調出来治才可申上候得共書面之条書此
取取以系卷ハ上納仕方此方所動定奉行に請作
取活可被下候依之此取申上候以上
亥十一月
同月十五日酉ノ刻前江城本丸潮見坂番所後留
守居番部屋脇飯方詰所ヨリ出火本丸及二丸
時ニ火移リ猛火焰々消防ノ術無ク大將軍ニ吹

上へ勤坐事急ニシテ奥向ノ宝物重器ヲ始調度
雜品多クハ灰燼ニ屬シ中ニモ惜ムル者ハ諸有
司ノ各局ニ備置ケル古今ノ書史内外ノ記録往
復ノ書牘等日勤ノ諸吏退散ノ後僅ニ宿衛ノ者
而已火燭ヲ潛リ烟ヲ吞ミ千辛万苦持出スモノ
若干也ト虫尸盡クハ人間ナク祝融ニ罹ルモ歎
カラズ小笠原島ニ關係ノ書類ハ一葉半紙モ残
ルモノナク矣鳥有トハナリシ也小笠原島開拓
再興ノ台命アリテ其事務ニ関ス者ハ南島掛ト
唱ヘ一課ヲナシ彼島嶼ニ係ル事件ハ内外ハ往

復ヲ始メ大小ノ事務盡ク南島掛ニテ取扱スル
ヲ以テ各國公使領事等トノ往復書翰取扱記及
書翰留等モ別冊ト為シ外國事務平常ノ記録ト
合綴セザリシカバ今小笠原島事件ノ書類ノ傳
ハラサルハ此火ノ災ニ因テ也抑江城祝融ノ災
厄アル事本西兩城總テ一度當城基立ノ権輿
ヲ温ルニ
後花園天皇ノ長祿元年 明天順元年 洋千五百五十七年 鎌倉ノ管領
修理大夫上杉定政カ長臣左衛門大夫太田持資
入道道灌劄テ築城以後連綿今ノ東京城則是也

先是道灌ハ當國荏原郡品川ノ館ニ在リ此頃
關東蜂ノ如ク乱ル下總ニ下野守東常縁兵ヲ
起シ陸奥入道馬加光輝ヲ討伐セリト馬加光輝
ヲ攻メ上總ニハ武田入道兵ヲ擧ケ廳南鞠谷ノ
兩城ヲ經營シ猶籠テ國中ヲ押領ス安房ニ并刑
部少輔里見義實中村ノ城ニ在テ隣國騷擾ノ虞
ヲ窺ヒ國境ニ兵ヲ出シ所々ヲ侵害ス築田河内
守ハ關宿ヨリ討出武州足立郡過半ヲ所領トシ
市川ノ城ヲ衆取リ兵ヲ籠置尚近境ノ形勢ヲ覲
踰ス上杉方ニモ三浦ハ義固ハ本實^實三浦ヨリ起

テ相模國岡寄ノ城ヲ取テ近郷數ヶ所ヲ押領シ
大森安齋ハ竹ノ下ヨリ起リ小田原ノ城ヲ取立
足柄郡ノ地ヲ畧ス又武州ニテ亦上杉武藏入道
性順其男右馬助房憲父子人見ハ討出上杉ハ味
方ト謀シ合セ深谷ニ城ヲ築シカハ左馬頭成氏
之ヲ聞驚愕大事也敵ニ足ヲ溜サスベカラスト
鳥山右京亮高山因幡守等ヲ先鋒トシテ出張サ
セシム上杉方モ勢ヲ岡部原ハ繰出シ烈シク鬪
戦ニ及セシカトモ遂ニ上杉方敗レ井草左工門
尉ヲ始久下秋元ノ人々其他、逞兵殘少キニ討

ナサレ成氏方王軍ニハ勝少トモ其在大將島山宅
深手ヲ負ヒ乱軍ニ討死シテ其軍是迄也下
引返ス上杉方ハ新田岩松小五郎金井新左衛門
以下新手加高再度谷戦ニ成氏ノ軍敗北足
立、郡ハ引返ス如此兩野房總武相ノ六國一時ニ
修羅ノ衢トナリ何時不虞ノ變ヲラシモ計ハ難
シト修理太夫上杉持朝入道ハ武州入間郡川越
ニ城ヲ築キ道灌カ父備中守資清入道道真ハ同
國埼玉郡岩槻ニ城壘ヲ營ミシハ同時道灌モ
豐嶋郡江戸ニ城地ヲ開キ康正二年經營ニ係リ

翌長祿元年四月ニ至リ落成此時河越岩槻兩城
モ全ク成功シタリケシ鐵倉大双紙ニ同時築城
ノ事ヲ載タルヲ以テ知ルニ足レリ却說道灌ハ
新築ノ江戸城ニ移リ此ニ居ル事三十年城中ニ
燕居ノ室ヲ造營南軒ヲ靜勝ト号ケ東軒ヲ泊船
ト呼ヒ西軒ヲ含雪ト称フ道灌ハ文武俱ニ長シ
志モ優美ク和歌ヲ善ク詠タリ家ノ集ヲ慕景集
ト号ク斯文事ヲ好ムヲ以テ万里居士ヲ江戸ノ
城ニ招キ入居士山水ハ眺望ヲ称揚シ窓含西嶺
千秋雪門繫東吳万里舟ト古人ノ詩ヲ引其美景

江亭記中見エタリ此年間扇谷氏杉定
政山内人兵部少輔上杉房顯互謀權勢争比間
計ヨ以テ定政ニ道灌ヲ疑ハシム定政思慮薄ク
其間計ニ陥リ入ヲシテ道灌ヲ浴室ニ刺殺ス是
文明十八年其後定政カ子同氏五郎朝長同修理
大夫朝興共ニ相續洋テ江戸城ニ居テ專隣國
窺ハレト守リシカドモ我々朝興十郎朝中
後柏原天皇ノ大永四年明嘉靖三年
洋千五百二十四年正月十三日
左京大夫北條氏綱カ為ニ落城ニ朝興八川越
敗走ス自是後ハ氏綱カ富永神四郎遠山四郎在

衛門等ヲ城代トシテ此ニ居ラシム氏綱カ男九
京大夫氏康其男左京大夫氏政其男左京大夫氏
直綱至ルマテ四代ノ間ハ北條家ノ持城トシ此
間遠山富永両家守リ居タリ朝興カ其孫氏康
正親町天皇ノ永祿七年明嘉靖四十二年
洋千五百六十四年大田新
六郎康資兄弟小田原ニ叛キ同苗美濃守資正入
道三樂齋ニ謀シ合セ安房守里規義弘ト同シ下
総國市川ノ城ニ楯籠リシカバ北條ヨリノ討一手
トシテ遠山丹波守富永三郎左衛門北総國府臺
ニ向ヘ進軍其圖ヲ失ヒ却テ敵ノ討策ニ陥リ二

人共ニ討死ス然レドモ氏康父子亦用川原^原以馳
來リ大ニ鬪戰シ三樂義弘敗シ北條北軍勝リ
シカハ江戸城異ル事ナリ亦田原ヨリ之ヲ
守リ北條治部丞遠山左衛門等城ヲ勤ム
後陽成天皇天正十八年^{明萬曆十八年}豐臣太
閤兵ヨ出シ北條カ居城小田原ヲ政ム此時遠山
左五門佐景政ハ小田原ニ籠城セ其弟河村兵部
少輔同甥遠山丹波守江戸城ヲ守リ居カドモ
北條家没落シ關東ハケ國ヲ德川氏ニ所領ス
ヘラレ江戸ヲ居城ト定メ同年八月朔日入城ス

リシ也事跡合考ヲ考フルニ江戸ハ海端ノ汐入
田畑ナドハ僅ニテ九八百石許不費也ト家康平
日ニ自負セラレシト見ユ岩淵夜話別集ニモ此
事ヲ記セリ友人旧幕臣伴直剛カ家藏ト享祿年
間江戸城留古板アリ何者カ天保カ未此圖ニ些
作意ヲ加ヘ長祿江戸圖トスルモ其間ハ微トスル
ニ足ラネト直剛カ藏スル古板ハ江戸城ノ往昔
ヲ見ユニ足レリトスヘシ其頃ヨリ市街トテ
モ備ハラス四辺原野渺茫村落疎也天正入國以
後日ヲ重ネ月ヲ追ヒ天下ノ諸侯此ニ參勤シ藩

卸莞ヨ並ハ市鄺ノ家屋鱗差シテ縦横ハ四街ノ
百八町斯繁昌ノ地トナルニ從テ柳營ノ殿舎漸
々ニ造營セラレ本丸ニ丸三丸西城等大厦高堂
陸續ト建列リ也
明正天皇ノ寛永十一年明崇禎七年閏七月廿三
日軒遇突智ヲ神ノ荒暴アリテ本城火ノ災ニ灰
燼ト為レリ長祿元年當城創築ヨリ此年迄百
三十四年ノ間祝融ノ有無ヲ記録スル者無ク
ハ詳ナラネド入後以後四十五年ノ間ニ火災
ナカリシハ確也タシカ災ルニ僅六年ノ後同十六年八

月十八日又火アリ夫ヨリ十九年又過
後西天皇ノ明曆三年明永曆十一年正月十八日
本郷丸山本妙寺坂邊ヨリ出火又為レ二本
城厄災ニ罹リ又九十年ノ後
櫻町天皇ノ延享四年清乾隆九年今年五月
皇太子ニ御讓位アラセラル一月廿八日
桃園天皇御代ヨ知シ食シカドモ未夕御位讓
リ以前四月十二日西城ニ火アリ其後九十五年
ヲ隔
仁孝天皇ノ天保九年清道光十八年三月十日西

城又祝融ノ災アリ
 同御宇ノ弘化元年清道光二十四年五月十日日本
 城火災ニ罹リ九年後
 孝明天皇嘉永五年清咸豐二年五月廿三日西
 宝藏火アリ殿舎灰燼同十一月廿八日富士見
 同御宇ノ安政六年清咸豐九年十月十七日本城
 中ノ口邊ヨリ出火ニ命鳥有テ為リ又五年ノ
 後則本年文久三年六月三日日越飯倉五箇目邊ヨリ出
 火其火飛テ西城ヲ焼キ六月ノ後今度ノ本城

祝融ニ至リ本西ノ二城ニ九廿ノ三焼シカバ
 一先清水ノ館ニ入リト同ノ廿六日由安ノ屋
 形ニ滞坐アリ也
 元治元年清同治二年ニ至リ再外國奉行連署
 于建言又
 南海小笠原島以候條向之
 小笠原島之義ヲ去ル酉年十二月中水野筑波
 守以自附報部帰一尋未開拓為被差免決初各
 國公使ノ旨未觸達未成既ニ亞英公使等

同島版圖之義ニ付種々申出遊義有字様
得た結局は方新現以可拓ニ未味遊義ハ此
鞭を被為着伏姿ニ相南彼方五分弱海座ハ
事故活而可申立辭柄無之生優懸止仕伏義
三為之將方書兩人帰帆之費支配向并海徒目
附以小人用附等同島取帰則之為差跡ハ蓋彼
以役所亦石碑等取建平治ハ丈民を以福ハ
未本同島支配之義七以代官江川太郎九由門
ハ被作付同人手付手代之内ニ而為未法伏様
ハ作活蘇美之要ハ較年四月中東海道筋生変

村ニおのて島津三郎供方之英人を殺傷仕
好一條ニ而同國より數艘之軍艦善坂ノ公使
より候急之義強而申立事概ニ等兵端を以
用則活控之景況ニ而以能急不少折柄遂ニ同
島在初之脱以在
可惜此書未本ニ脱ス他日搜索シテ補ヒ加フ可

レ

明治十五年九月
 阿部柳助
 鈴木行一
 校合

